

100  
341

三都看花記

三都看花記

○芳山看花記

明治廿四年の春四月吉野の花見むとて出立つ人々は、穆々慤々如々の  
 三道入にて、無々道人もまた伴へり。穆々道人は神道の信者にて、其の志  
 は勤王報國に存せるが、その氣質を評すれば正直一遍の男なり。慤々道  
 人は儒道の信者にて、其の志は理世安民に存せるが、その氣質を評すれ  
 ば方正謹勅なる男なり。如々道人は佛道の信者にて、其の志は轉迷開悟  
 に存せるが、その氣質を評すれば洒落なる男なり。無々道人は仙道の行  
 者にて、其の志は長生久視に存せるが、その氣質を評すれば間拔けなる

川合清丸 著



野なり。されば此の四道人はあの一く學ぶ所を異にし併せて氣質も違ふ。とも學道の方に由りて私心と私見とを取り除けたれば交際頗る親密にして自他相補ひ彼此相助けつゝ今は一心一體の人に似たり。故にいつも事業を同うし苦樂を共にし出入起臥をも一にしたれば此の度の花見にもまた四人づれにて出で立ちぬ。折しも四月の十四日は昨夜の風雨にて色香は少しく褪めたれども名にしあふ千樹万樹の山櫻は峯にわたり谷につゞきてさながら雪か雲かと疑はれたり。四人は彼處にたゞずみ此處にさまよひ思ふがまゝに逍遙して長き日の暮るゝを忘れつゝうかれたりしが入合ひの鐘に驚かされて喜藏院といふ寺に宿りぬ。」

喜藏院の住持はわが大道社の社員なりければいと深切にもてなして

夕餉も終りぬれば煎茶々盃をひねりつゝ初めての登山ひめもすの遊覽諸君の所感はいかに取て清談をうけたまはらむと問はれたり。是に於て正直一途の穆々道人は膝を進めて説て曰く余は六田川を渡りて吉野山の脊つゞきを登るゝ思ひまはせば普天率土を知ろしめし。萬乗の至尊の普天の下率土の濱に玉體を置かせ給はむ處なくて眞木の立つ此の荒山の山奥にあじきなくぞ世を忍ばせ給ひつると思へばそゝろに悲しくなりぬ。それより村上彦四郎義光戦死の場と標せらる處に進み來たり。石塔の下に杖を卓て思ひ起せば元弘二年三月に(明治二十四年より五百六十年前)賊臣北條高時逆威を恣にして恐れ多くも後醍醐天皇を隠岐へ流し奉り。一宮親王を土佐へ。二品親王を讃岐へ。其の他忠義の卿相をばあの一く遠國に配流したりし其の中に大

塔宮護良親王のみは巧みに難を避けさせられ。般若寺の經函の中にさへ御身を忍ばせて。終にこの吉野の山に籠り給ひしが。翌年の閏二月に。賊軍搦手より攻め入りて。其の勢はげしければ。宮も今は是れまでなりと。御討死の覺悟にて防ぎ戦はせ給ふ處に。村上彦四郎驅け付けて申上げゝるは。恐れ多くは侍れども。君の召されし錦の直垂を義光へ下し賜へ。義光不肖ながら御命に代り奉りて。討死し侍らむ。其の隙に。君にははやく落ちさせ給へと。高野山へ落とし參らせて。雄々しくも寄せ來る賊軍を切りまくり。薙ぎまくりて。潔よく討死せしは。此處なるかと思へば。胸もつぶるゝを。兩の手にて撫であろし。名高き一目千本の勝をば。涙ぐみし目にて左に見あろしつゝ。吉水院に詣づ。吉水院は延元元年十二月に。今より五百五十六年前。後醍醐天皇逆賊足利高氏の爲に。都を寤

しめ出され給ひて。此の山に行幸し給ひし時に。初めて成らせられし行在所にて。今も當時の玉座を始め種々の御物を珍藏せり。寺の前に神廟ありて。吉野宮と稱す。是れぞ。後醍醐天皇の神靈を奉祭せる所にて。近き年別格宮幣社に定め給ひし假宮なる。畏みくも額突き拜み奉りて。思ひ出せば。去年の春。皇后陛下も此處に行啓まし。て。天皇の御像を御拜在らせられしが。やゝありて。御昇格以來。此の宮へ。宮内省より參拜せし人やあると問はせ給ふ。宮司長まりて。陛下の御參拜ぞ御始には侍ると。御答へ申上げしかば。陛下は御像に對して。御冠を傾けさせ給ひ。嗚呼萬乘の至尊にまし。くながら。逆臣の爲に世を忍ばせられて。斯るわびしき荒山に。御生の涯り宸襟を傷めさせたまひしものを。いまだ問ひ奉れる人も無かりしは。勿體なしとや思ほし召されけむ。物を

も宣はで。まばし打ちまほれさせ給ふ御氣色なりしが。やがて御涙のはらはらと御袴のうへにこぼるゝを。侍従長見あげかねられて。宮司に閉扉仕へまつられよと申されしは。此處なりけりと。また一しほの懐をぞ添えにける。それより南朝の皇居なりしといふ金輪寺の址を弔へば。藏王堂の右の方なる低みの處なり。今は數畝の畠となりて。昔の形見とては。一つの礎だにも殘らず。たゞ麥の秀で。茅花の花さくを看るのみ。されど延元四年八月十六日の丑の刻に。今より五百五十二年前。後醍醐天皇の男たけびにたけびて。崩御まし。しは。正しく此處ぞと思ひ奉らる。其の御遺勅に宣はく。生々世々の妄念となるべきは。朝敵を悉く亡ぼして。四海を泰平ならしめむと思ふ一念是れのみ。朕が隠れし後は。新帝親しく政を執りて。賢士忠臣事を謀り。義貞義助か子孫を股肱の臣と

して。以て恢復を圖るべし。身は南山の苔に埋もるといへども。心は常に北闕の天を望まむ。若し命を背くものあらば。君も繼體の君に非ず。臣も忠烈の臣に非じと宣ひて。左の御手に法華經を持たせ給ひ。右の御手に御劔を按じて崩じ給ひし。敵慮のほどは。何とも角ども申し上げむ言葉ぞなき。されば別格官幣社吉野宮を新たに造り奉るべき地は。此處を置きて。決して他には在らざるべきを。いかなる譯にや。斯くまで敵慮の凝らせ給へる皇居の御址を。一枚の荒れ畠に附し去りて。吉野山の入口のまかも賊軍どもが蹂み汚したる。縁も由緒もなき地に宮所は定まりたる。況て予はつらく。其の定まりたる地を相するに。是は。天皇に拘らず。總ての神靈の安じ給ふ所にあらざること。地勢によりて明らかに知らるゝをや。かゝる地勢の有状をも察せず。また神慮の幽契をも稽へ奉

らずして。不當の所に宮造り仕へ奉らむことは。實に不忠義不誠實の至りなり。語を寄す。世の神明に忠義にして。事物に誠實ならむ貴顯紳士たちよ。願くは是等の事情を九重の上に聞えあげて。天皇 皇后兩陛下の敷慮を注がせ給ふ吉野宮をして。其の所を得させ奉らむことを。若しとも無くば。後來の吉野の山に。又一つの千載の遺憾を添えなむ。次に花の蹊を下りつ上りつして。塔尾の山陵に參拜す。詩客の詩歌人の歌にて。延元陵の憐れはかねて知りつれど。現に參拜しては。昔の憐れは物の數かは。實に身は南山の苔に埋もるとも。心は北關の天を望まむと。遺勅遊ばされしまに。御陵さへ北に向はせ給ふを拜み奉りては。一片の忠魂も。腹一ばい胸一ばいに充ち塞りて。奏し上げむ言葉さへ出でなくに出で。盡させぬものは。唯萬行の涙なりけり。覺えずも。三道人に促され

て。御前を辭しつ。御階の下なる如意輪寺に詣る。此の寺の住持も。わが大道社の社員なりければ。慇懃に案内して。如意輪觀音。および秘藏の寶物を拜見せしむ。其の中に正行公の鏃にて。辭世の歌(かゑらじとかねて思へば梓弓なき數に入る名をぞとむる)を彫りつけられし古扉あり。是れぞ公が最後の手形見なる。其は正平三年の正月(今より五百四十四年前)賊將高師直同師泰。中國四國東山東海の兵八萬餘騎を將ゐて。此の行宮に攻め向ひければ。補正行弟正時は。是れぞ最後の軍なると決心して。一族残らず引き隨へ。行宮に詣りて。天顔を拜し奉り。時の帝 後村上天皇なり。即ち 後醍醐天皇の皇子。次に此の 帝の廟に謁し。即ち必死の勇士百四十三人の姓名を書付けて。四條驛に出陣し。僅か三千騎に將として。數萬の大敵に當り。剩へ身は三百騎を帥ゐて。敵の中軍を突き

破り。殆ど賊將を獲るになん／＼として。刀折れ矢盡きぬれば。賊の擒とらとならじとて。正時と刺し違へて斃たれ給ふ。年二十二歳とかや。斯る魂もて詠み出で給ひ。斯る腕前もて彫り付け給ひし形見なれば。五百歳の下。觀るものをして肝寒く膽顫たんはしむるぞ道理なる。又この寺は。かゝる尊き由緒の存する所なれば。其の廢たれたるを慨いたみ歎きて。今の住持の再興に盡力せらるゝも亦道理なり。それより喜藏院へ歸る道すがら。四方を回顧しつゝ。熱々思へば。斯く荒涼たる山谷の間にすら。猶賊兵の爲に犯され給ひて。玉體を安むじますこと叶はず。或は賀名生へ。或は金剛山へ。一天万乗の君が流涙し給ひし昔思へば。賤しが身は何の不幸にて。五百年の昔に生れ出でざりけむ。若し當時そのときに生れあひなば。義光正行等の如き働きこそ出來ざらめ。箇かほどに憎にくき高時高氏の逆賊原に。恨みの一太

刀を報いむことは出來つらむ。縱たそも出來ずば。近衛の一兵卒となりて。大君の近き御楯たてと成るべきものをと。慷慨の念。悲憤の情に勝かへざりければ。霞につづく花の色も。何となく悲みを含み。樹の間をつたふ鶯の音も。いと憐れを添えたりき涙と。と汗とを拭ひつゝ。息をも繼がで言ひ出でたり。」

惺々道人は。四角ばりたる顔付きにて。煙草をくゆらしつゝ。聞きたりしが。吸す殻がらちとして言ていはく。穆々道人の慷慨話しは。一應道理に聞こゆれど。畢竟是れ一場の愚痴物語なり。それ人仁義禮智の徳を性として生れし以上は。不仁不義不禮不智の行ひを見ては。假令百年千年の往事たりとも。誰れか爲に悲憤の情を發たさいらむ。その悲憤の情を以て。當時治亂の由る所を觀察し。これを今世に反照し。今日に應用してこそ。學問の

所詮とは謂ふべけれ。古きを温ねて新きを知らずば。如何でか人の師とならむ。予も若き時太平記を讀みて。元弘元年九月廿九日の夜。陶山藤三小見山次郎の賊奴が笠置山の行宮に。恐れ多くも火を懸け奉りしより。後醍醐天皇を始め供奉の人々。みな跳にて逃出でたまひ。剩へ闇夜に紛れて。おの／＼と成りぬるを。中納言藤房弟季房の兩脚のみは。御手を引きて山を下り。勿體なくも玉體を野人の形にやつし。參らせて。赤坂城へと落とす奉る途すがら。三日迄御食をさへ斷ち給へば。君臣ともに疲れ果て。主上には井手山の岩角を御枕にて。暫しまどろませ給ふ折から。松吹く風のはら／＼と梢の露を拂ひおとしけるを御覽じて。さして行く笠置の山を出でしより。天の下には隠れがもなし。と詠じ給ひければ。藤房卿涙をおさへて。いかにせむ憑むかげとて立ちよれば。

猶袖ぬらす松の下露。と和へ給ひし程もなく。終には逆賊の手に擒はれさせ給ひし處に至りて。非常の世變もあれば有るものなりと。且は驚き且は憤りたりしが。憤りて覺悟せしはよし。驚きて魂消しは不覺なり。いかにとなれば。今の世とても此の事なしと斷言せられざればなり。請ふ子細にこれを説かむ。そも／＼かゝる世變は。大義名分の地に墜ちて。大逆無道の天に滔こる有様なるが。言を換へて云は。私心の増長して公心の消滅せる現象のみ。夫れ公心を増長して私心を消滅すれば。大義名分となり。大義名分を實踐履行すれば。忠臣義士となる。忠臣義士の數殖る行くは。天下太平の祥なり。夫れ私心を増長して公心を消滅すれば。大逆無道となり。大逆無道を實踐履行すれば。亂臣賊子となる。亂臣賊子の數殖る行くは。國家亂亡の兆なり。予兩眼を開て國家今日の形勢を見透



すに。廟堂の事は言へば悪しければ言はず。國會議員に公心を存して私心を忘るゝもの果して多數なりや。政黨々員に公心を存して私心を忘るゝもの果して多數なりや。社會の風俗は公心を長じて私心を消する方に傾ける乎。國家の教育は公心を長じて私心を消する方に向へる乎。今春大學總長。輦轂の下にて。公衆に演説して曰く。世に公利公益といふ道理なし。唯私利公益あるのみと。教育の針路その指す所を知るべきのみ。然らば則ち名教を以てみづから任ずる儒學家に。大義を唱へて異端を廢し。即ち天下の公心を長じて。一世の私心を消するもの有る歟。予は旗を捲き戈を倒して。異學の門に降るものあるを見る。忠臣義士を抹殺して。時好の機に投ずるものあるを見る。聖經賢傳を説き枉げて。名利の苞苴とするものあるを見る。未だ名教を以て治亂の數に當りて。天徳を

予に生ず。桓魋其れ吾を奈何むと云ふものを見ざるなり。然らば則ち道徳を以てみづから任ずる宗教家に。正法を振興して邪説を碎破し。病に應じて藥を與へて。能く西洋の毒熱を醒ますものある歟。余は情量識解を逞うして。西洋哲學に伯仲せむと擬するものあるを見る。負債償却の義務を怠りて。身代限せられむとするものあるを見る。本末一和の法味を忘れて。曲直を法庭に争はむとするものあるを見る。未だ身心を名利の外に脱して。大道と合體するものを見ざるなり。夫れ天下の勢ひ斯の如くにして。滔々日々下るは。是れまさしく歩を大逆無道の途に運ぶものゝみ。腫を理世安民の方に向くるものに非るなり。然らば則ち今日の太平は。全く表皮の裝ひなり。不幸にして此の表皮の破るゝ時。到らば。内の臟腑は悉く糜亂して。謂はゆる恩も知らず。義も知らず。禮もなく。恥

もなく。唯利是れ食る大逆無道の糞袋あるのみ。此の糞袋が轉げ廻はる日に至らば。軍隊も憑むに足らず。たま／＼以て大逆無道の味方となるに足らむ。法律も憑むに足らず。たま／＼以て亂臣賊子を保護するの具とならむ。是の時に當りては。北條高時も肩を怒らして起き來らむ。足利高氏も面を脱て顯はれ出でむ。高師直師泰も賊兵を引き連れて。忠臣義士を攻めまはらむ。逆賊に目くされ金を貰ひて。行宮に火を放ちし陶山小見山も出で來らむ。總て今日利を視て節を變じ。得に臨みて操を枉ぐる奴等は。悉く此の輩が兄弟分となり。子分となり。手下となり。手先となりて暴れまはらむと。何ぞ元弘建武の昔に劣るべき。いかにとなれば。天下の金科とも玉條とも尊むべきものは。大義名分にて。國家の杖とも柱とも憑むべきものは。忠臣義士なるに。今日は其の忠臣義士を意地めま

はるものゝみありて。獎勵するものなく。其の大義名分を打ち毀すものみありて。養成するものなければなり。されば其の大逆無道の世の中に。大義を掲げて賊膽を破り。公道を明らかにして私窟を陥し。身を以て道に任じ。道を以て國に許して。卓々凛々死して渝らざるもの。知らず天下に幾人かある。是れこそ我等が仰ぎ慕ふ楠新田名和兒島菊池土居得能諸氏の後繼なれ。予は昔を鑒みて今を知り。今を鑒みて將來を知り。此れは是れ天下の治安に赴く道筋。此れは是れ國家の亂亡に走る道行きといふことを。掌の中を視るが如く。明らかに看透すゆゑに。かゝる舊皇居古戰場に至りては。一しほ今古の感に堪へず。滿山の花王も。心あらば定めて吾が滿腔の赤心を知りつらむと。發明らしくも申述べたり。如々道人は。書院のうしろなる八重櫻の夜の景色に見取れて。立て看つ

居て看つ散り來る花に撲たれながら餘念なく賞翫して兩道人の物語をば聞くにもあらず聞かぬにもあらざる體にて居たりしがソロソロと口ほどけやしたりけむほゝ笑みながら膝を交へて語りけらく惺々道人は穆々道人の慷慨話しを一場の愚痴物語なりと言ひ貶して自己の所見を演べられしかど余を以て之を觀ればまた是れ一場の愚痴物語のみ蓋し穆々は五百年の昔に泣き惺々は今日の今に泣く泣く所は替はれども泣き事は即ち一なり夫れ泣き事は愚痴より起る愚痴は婦人の腹の底に多きものぞ丈夫の胸中には更に別段の物こそ有らまほしけれ余は日頃紅塵萬丈の下に奔走する代りに此の度は芳雲千里の郷に遊ばむとて登山せし事なれば六田村より枝に苦むす老櫻樹の下を歩み登るに隨ひてまづ襟懷の清淨なるを覺ふ况や一目千本の勝境

(俗には口千本といふ)に至りては千樹萬樹の山櫻の白玉をも恥ぢらひ水晶をも欺むけるが日に媚び霞に映じて咲き滿てるのみか黄金色なる若葉のうら若げなるがソヨソと吹き來る風に打靡く風情さへ見えわたりて其の麗しさは得も言はれじ矧て千樹萬樹の花にも葉にもあつから濃淡あり疎密あり淺深あり高低ありて互に彩どり互に文なしつゝ春の心の長閑けさうららかなさを表し出でたるめでたさは繪にもかゝれず詞にもべられじ先哲の我が神州正大の氣が發爲萬葉櫻衆芳難與儔と詠せしもさる事乍ら余は更にうらくと霞む芳野の山櫻さながら春の精神なるらむとや言はましそれより村上義光が墓前を過ぎて嵐山の下を過ぐ豫てより洛西なる嵐山の櫻は芳野の花の種とりてやことなき帝の裁へさせ給ひしとは聞きたりしが今此の

山の名を聞きては、翹その種のみならず、其の名さへ此處より移させ給ひしとは知らる。など侶の道人と語らひつゝ、大橋を渡りて、關屋櫻がもとを行く。治まれる世の樂しさは、名山勝地到る處に關守もなく、詩人は詩を口ずさみつゝ、歌人は歌を咏じつゝ、花に月に心のまゝにあくがれ行かるれど、皇居ましくし亂れ世のそのかみには、此處に嚴重なる關門を構へて、往來の人を去らべ給ひけむこと、其の地形の有様と、櫻樹の名残とによりて知らる。幾程もなく銅の鳥居を過ぎ、鳥居は近年の大風に仆れたり。大門を通りて、藏王堂に詣る。此の邊には、雲井を衝くばかりなる老杉の立てる中に、若やきたる櫻花の打まじりて笑めるは、殊に見ばえあり。彼方此方を見まはす内、咲く花のと絶ゆる間より、左のあなたに床しげなる岡の見ゆるを問へば、秀吉公の花見塚なりと答ふ。宮殿を

珠玉にし、幔幕を錦繡にし、瓦をさへ黄金にしたるほどの華奢ずきの大將も、花には風流心の動くものとして、よしの山誰れとむるとは無けれど、今宵も花のかけに宿らむ。と洒落給ひしは、彼處の事とぞ思ひ起さる。それより東南院を馬手に經て、吉水院を弓手に通りて、袖振山の麓を袖ふりはへて、喜藏院の八重櫻は、今宵のながめと残り置きて、竹林院の庭にいたる。此の庭は、彼なたは岡にて高く、此なたは庭にて平らかに、岡に續ける芝生は、廣がりて自然の青氈を敷き、庭に欹てる岩石は、疊なはりて天然の風致を補ふ。その間に並び立てる櫻は、大概老木にて、枝にも梢にも苦むしたるが、參差として影を交へ、玲瓏として色を映ずる様。總てめでたし。中にも早く咲きし花は、のどかなる風に續紛と枝を辭して、未練を残さず散り亂るゝ情、誠に潔よく、遅く開ける花は、うらゝかなる日

に歴ふかく笑ひとらけて。餘念なき係ことに愛らし。櫻の花の末のくぼめる處を。花の歴と。櫻戸の翁は名づく。かゝる庭の面は。終日眺め暮らしても。飽くとはなけれど。猶看ぬ處の偲ばるゝからに。立ち出でゝ小橋をわたり。御幸の左を左に見て。水分神社の方に。笱を曳きつゝ。一目千本の勝俗これを奥千本といふ。を弓手に見やる。八田知紀が。よしの山霞のおくは知らぬども。見ゆるかぎりは櫻なりけり。と歌ひ出でしは。此のあたりの事にや有らむと思ひやられて。其の景色言はむかた無し。余は東京にて。年々招魂社畔の櫻。墨陀堤上の花を看るに。共に一面の平地にて。向ふに當處なきゆゑ。唯一帯の白糺糊を見て。未だ斯の如く。曇々彩雲を曇み。層々玉瀾を漲らすものを見ず。上野小金井の花は。花の光松に映じ。松の緑花に映じ。緑白互に映ずるゆゑに。大いに花の眞彩を發す。殊に吉

野の花は。曇々の峯巒が。向ふの當處となりて。或は看あげ。奥千本は看あぐ。或は看あろし。口千本は看あろす。花と人と居處を異にするがゆゑに。言ふべからざるの勝景を爲す。是れ吉野の聲名を。天下に擅にする所以ならむかなど。晴くうちに遠近の山寺より。入相の鐘の響きわたるに驚かされて。聞き及べる。鹽竈櫻。雲井櫻などは。明日こそ問はめ。今宵は喜藏院の八重櫻を賞せむとて。歸り來つるなり。余が見し所は。是れのみと。微笑しながら。語り出でぬ。

無々道人は。間のぬけたる顔つきにて。鼻毛を拈りつゝ。聞きたりしが。穆々惺々。兩人の默然として。睡なきを見て。今や吾が話し番に廻り來しと。や思ひけむ。口輕にさし出でゝ曰く。余はたゞ終日。遊覽せしゆゑ。別に是ぞといふ意見もなければ。先きに聞きつる。三道人の所見を。

高みの見物にて品評せむ。穆々の演説は。慍々は一場の愚痴物語なりと。事もなげに言はれしかども。忠愛の元氣の發する所。余をして數行の涙をこぼさしめたり。慍々の演説は。如々はまた是れ一場の愚痴物語のみと。口眞似して言はれしかども。道義の精神の溢るゝ所。余をして双拳に汗を握らしむ。此は一對の好敵手とや言はまし。如々の演説に至りては。風流にして優しくは聞こゆれど。至誠忠實の足らぬ故にや。また腦に響き骨に徹するの處なし。要するに。通人の花見のみ争でか。丈夫の談論なるべき。丈夫の胸中には。更に別段の物こそ有らまほしけれと言はれしは。恐らくは廣言ならむ。余が見る所は斯の如し。若し當らずば。いつもの如く誨へ給へと云ひて。頭を低れて控へたり。」

如々道人は。相替らず微笑しながら。懇ろに誨へて曰く。無々道人よ。忠臣

藏の城渡しに。團十郎が由良之助を演ずるや。復た一片の言を出さずして。忠義の骨髓に填ち。無念の心腸に塞がる状を。その不言の間に呈はす。観る者感嘆して。天下無双と稱す。而るに田舎漢あり。罵りて曰く。此の由良之助は。啞かど。是れ其の言はぬ處に。言ふに優るゝ。伎倆の存するあるを知らざるなり。古人の曰く。君子は一言以て智となし。一言以て不智となす。言慎まざるべけむやと。酒の熟して甕に在るを。醱醱蘇といふ。列しさは。列しけれど。其の品は下等とす。漉して清めるを。新酒と云ひ。貯へて久しきを古酒と云ふ。古酒に至りて。始めて王公の盃盤に上るべし。田夫は其の味を薄しとして。醱醱蘇を好しとす。されども。是れ豈酒の眞味ならむや。砂糖の製して塊まれるを。黒砂糖といふ。甘さは甘けれど。其の品は下等とす。晒して色の返ゆるを。白砂糖といひ。又晒して雪の如くなる

を雪白といふ。雪白に至りて。始めて上等の調理。高品の菓子に用ひるべし。野人は其の味を淡しとして。却て黒砂糖を好しとす。されども是れ豈砂糖の眞味ならむや。無々道人よ。余が説く所の。子が腦に響かず骨に徹せぬは。猶田夫野人が古酒と雪白とを喫して。是は淡白なり。食甲斐なしと。斥くるものにあらざるを得むや。穆々惺々兩道人の説に。耳を傾け意を向けらるゝは。又猶醪醪と黒砂糖とを喫して。是れこそ甘し冽しと。心醉せし例ならざるを得むや。兩道人の説く所は。花見の眞意にあらざるぞかし。一言以て智となし。一言以て不智となすとは。子の事なり。子よ言まことに慎まざるべからざるなり。」

花見に付きて思ひ出だせる事あり。子が爲に説かむ。余壯年の時。初めて東上して。花を東台の櫻が岡に見る。折しも一隊の西洋婦人。ひとしく鞍

馬に鞭うちて。群客の中を衝き來る余。乍ち不平を感じて曰く。奴輩吾が神州の春を蹂躪す。高慢の類見るも忌々しと。乃ち去りて東照宮の祠畔に至る。至ればすなはち祠廟の金碧燦爛として。光彩目に眩きを見て。又不平を起して曰く。此の翁黠手段を以て。吾が皇家の有を瞞著す。其の尊榮仰ぐも憂さしと。遂に賞心を失却して歸りき。再び東上の日。また東台の春に遊ぶ。是時豪奢の翁あり。兩妓を左右に擁して。櫻雲臺の畔を歩む。その妓の艶容は。花の艶容よりも美はし。一見乍ち山出しの眼睛に粘著して。遂に半日の賞心を奪はるゝのみならず。併せて春宵一夜の情を惱殺したりき。三たび東上の時にも。亦東台の春に逢ふ。是時動物園前の垂枝櫻まさに盛りにて。其の後園の老櫻殊に見ごろなれば。歩を其の間に移すに。醉客の樹下に飲むあり。踊るあり。歌ふあり。叫ぶあり。娘伴の鬼と

なり子となりて。樹間に驅逐するありて。喧歴雜選いはむかたなければ。又賞心を奪はれて。惜むべきの俗物。此の芳園を俗了すと。獨ちつゝ去りし事ありき。凡て是等は。外より刺撃せられて發動する客氣にて。内外に透き徹りたる至情に非れば。義氣のやうに見えても。當てにならず。剛氣のやうに見えても。強からぬものなり。穆々惺々の慷慨話しは。さすがに是よりは上等なれど。猶客氣の餘習ありて。外境の紛擾を免かれがたし。是れ余が丈夫の胸中には。更に別段の物こそ有らまほしけれ。といふ所以なり。」

みづから主となりて。一切の外物を支配するもの。之を丈夫といふ。丈夫の人間に在るや。宰相の貴きもその意を移すこと能はず。秦楚の富もその志を易ふること能はず。資育の勇も其の節を枉ぐるること能はず。毛施

の美も其の情を動かすこと能はず。却て毛施をして。吾より其の美を完うせしめ。資育をして。吾より其の勇を働かしめ。秦楚をして。吾より其の富を有せしめ。宰相をして。吾より其の貴を保たしむ。此の人若し極樂に行かば。七珍萬寶中に主となりて。能く人天の一切衆生に布施せむ。此の人若し地獄に墮せば。鼎鑊爐炭裡に主となりて。能く一切の夜叉羅刹を驅使せむ。此の人花見に行かば。千紫萬紅の間に主となりて。自由に春意芳情を玩ばむ。此の人軍に立たば。硝烟丸雨の下に主となりて。自在に千軍萬馬を指揮せむ。いかにとなれば。心脚下に在りて。毫も外境に動揺せられざればなり。丈夫の胸中には。此の物こそ有らまほしけれ。若し夫れ人間に在りて。富貴利達に動揺するものが。極樂に行かば。金銀瑠璃に心が動き。百味の飲食に喉が吼え。歌舞する天女に情が紊て。地藏菩薩の



厄介物と成りぬらむ。極樂に在りて斯るものが。地獄に墮せば。血の池の岸打つ浪に魂まづ消え。劔の山の夜半の嵐に腸まづ裂け。油の釜の煮音に膽まづ蕩けて。午頭馬頭がなぶり次第に成りぬらむ。地獄に在りて斯るものが。吉野に行かば。慷慨の情に心奪はれ。悲憤の念に眼轉せられて。骸につらく花の色も悲く見え。樹の間をつたふ鶯の音も憐れに聞え。一目千本の勝もうるみて。其の本色を見失はむ。吉野に行きて斯るものが。軍に立たば。敵を憎むの餘りに。精神は頭腦にのぼせ。罌丸は下腹に釣りあがりて。進退驅引その機を失はむ。况や敵の箭文を送りて。戦を挑み。諷言を以て吾を激するに遇はむ。忽ちその謀計に陥りて。必ず大事を誤らむ。いかにとなれば心ほかに狂奔して。現在の脚下がお留守なればなり。田舎漢が吉原の娼妓を買ふや。身振ひ胸悸きて。雲雨巫山の佳境に分け

入ること能はず。此の漢。色情足ざるに非ず。轉た餘りあるが故に。己が情にて己が身を振ますなり。田舎相撲が晴れの土俵に登るや。未だ平日の伎倆を角はせざるに。忽ち翻筋斗に投げらる。此の相撲力足らざるに非ず。轉た餘りあるが故に。己が力にて己が身を投ぐ。世の中を看來れば。大概此の類ならざるは無し。是れ皆其の精神は善けれども。修行が未熟にして。俗に謂はゆる娑婆の灰汁がぬけざる故なり。種々の忠愛の情。愠々の道義の心。共に愛すべく尊むべし。余は唯未熟の處あるを見るが故に。まさかの時に兩人が翻筋斗せむことを心配するなり。迷を轉じて悟を開く。之を佛法といふ。迷とは何ぞや。斯の心が外物に轉ぜられて。現在の脚跟下がお留守になることなり。悟とは何ぞや。斯の心が内に主となりて。一切の外物を。吾より轉ずることなり。何をか現在の

脚跟下といふ。花見に來らば。花を見る處が。直に是れ現在の脚跟下なり。然れば一々の眺望に。一々の光明を放ちて。春意芳情の。ドテツ腹を見徹すべきに。却て外境に賞心を奪はれて。花に對して愚痴をこぼす。是れ即ち脚跟下のお留守になりし處なり。斯く團欒して話しをすれば。此の一言一語が。直に是れ現在の脚跟下なり。然れば一々の言語に。一々の光明を放ちて。言詮語詮の黒點を貫くべきに。却て息促き込みて。言早まり語迫まる。是れ即ち脚跟下のお留守になりし處なり。斯く一々の語黙動靜に。一々の脚跟下がお留守にならば。爲て居る事は夢中の所作のみ。然らば則ち諸道人は。其れ夢中に花見をして。夢中に談論し。夢中に生れて夢中に死ぬるものに非ざらむや。眼の覺めたる人にこそ。國の大事も法の大事も委ぬべけれ。夢中の人に委ぬむは。實に危険の至りなり。諸道人こ

の八重櫻を見よ。開くも散るも己がまに／＼なり。人が見ぬとて。葉がくれに小言を云ふ。蕾もなく。客が來しとて。八重を九重に咲く花もなく。世に惜まれむと。我慢を張りて。蕾ながらに散る花もなく。散るが愛しと愚痴をこぼして。梢にしがみ付く花もなし。皆是れ天真爛熳のまゝにて。彼れが現在の脚跟下は。豈夫れ立派ならずや。惺々道人は。滿山の花王も心あらば。定めて吾が滿腔の赤心を知りつらむとこぼされしが。余は滿山の花王に心あらば。定めて道人が脚下のお留守なるを笑はむことを心配するなりと。云ひて阿々大笑せり。」

笑聲いまだ已まざるに。當院の住持ハタと手を拍ちて。颯言して曰く。手は四道人の清談を逐一に承はりて。忽ち三道に悟る所あり。之を日本刀に譬ふ。神道は鋼鐵の地金なり。儒道は鍛ひあぐる鍛師なり。佛道は研ぎ

あぐる研師なり。茲に上手の研師ありとも。鍛師の鍛ひ出だす無くば。其の巧妙を施す所なけむ。茲に上手の鍛師あるも。鋼鐵の精銳なる無くば。其の修煉を施す所なけむ。また精銳なる鋼鐵あるも。修煉せる鍛師の手に由らざれば。争でか世界無双の日本刀と成らむ。茲に銳利なる樸身あるも。精巧なる研師の手を假らざれば。争でか水に蛟龍を斷ち。陸に犀革を斬ることを得む。穆々道人の重厚なる地金ありて。而して惺々道人の嚴格なる鍛煉あり。而して如々道人の峻峻なる磨礪あり。三のもの相待ちてこそ。大道社の今日はあるなれ。其は皆大道社のみならむや。昔先王の御躬みづから神道を行はせ給ふが上に。儒道を徴して學ばせ給ひ。又其の上に佛道を納れて修めさせ給ひ。三道ならび進ませられて。聖徳いよく赫灼たればこそ。制して國教とは定め給ひつれといふ。四道人

も手を拍ちて賛成し。首を擧げて回顧すれば。飛花亂墜して。夜院總て香ばし。

○東台看花記

壬辰の春四月十一日の夕月夜。如々道人は蔬食菜羹の晚餐に腹を膨らし。光風霽月の夜色に懷を放ちて。淺香書樓の欄干に憑かゝりつゝ。花あれば月なく。月あれば友なし。風暖かに境靜かなり。此の良夜を如何せむ。と嘆ずる折こそあれ。惺々道人入り來りて曰く。此頃は東台の花方に盛りにして。今夜は彌生の月も恰も最中なり。予年ごろの春を關するに。月の最中なる頃には花散り易く。花の盛なる頃には月虧げ易きは。常ならぬ世の習ひなるに。今年花と月と嬋を争ひ娟を競へること珍しけれ。いざ是より袂を聯ねて。東台の春に遊ばむと云ふ。如々も固より欲する

所なりければ。早々に杖履を呼びて出で。高等中學の弓手を横に通る。帝國大學の後を馬手に過ぎて。下谷の池の端にぞ出でにける。折しも月は大悲閣上の老松に懸りて。鬱蒼の色翫すべく。風は天妃廟畔の新柳を弄びて。婀娜の姿愛すべし。荷葉未だ出でずして。池に眠れる鴛鴦は竊に夜の衾なきを羞らひ。輕雲未だ收らずして。花に宿れる鶺鴒は時に月の陰あるを喜ぶ。吾等も袖を並べつゝ。不忍の池の邊を歩み忍が岡の麓を過ぎて。東照宮の石壇を登る。老杉道を蔽ひて夜趣森然たり。階を盡して少く進めば。廟門深く鎖して関として人なけれども。金碧燦爛として月に輝き雲に映れる有様は。滿庭の櫻花をして。さながら艶色なからしめたり。嗚呼慶長元和以降。武を偃せ文を興して。三百年の太平を開き。本府入城以來。庶を來し富を致して。百万戸の繁榮を基せしは。偏に公の德澤な

りと思へば。そらろに尊く畏こまれて。慙慙に拜禮して去る。それより五重の塔の前を過ぎて。動物園の方に歩む。此處の花は東台第一の早咲にて。今年も餘所に魁したりければ。早や誘ふ夜風にチラ／＼と散りそめて。空に知られぬ雪と降り來るは。中／＼に愛たし。京都の蓮月尼が「うらやまし心のまゝに疾く咲きてすが／＼しくも散る櫻かな」と詠せしは。吾等に代りて此處のあはれを歌ひ出でしものになむなど打ち語らひて。動物園の門前に至る。此の園には年ふりたる垂絲櫻の若木が中に獨りぬき出でし。思ふまゝにはびこり立てるは。洛東に名高き祇園の絲櫻にや比へむ。之に就て憶ひ起せば。京都遊學の當時に。友どち打ち群れて。彼の夜櫻を遊覽し。行くさ歸るさの道すがらに。解語の花をも品評して。口／＼に桃よ櫻よ梅よ柳よと浮れたりける昔の春の偲ばれて。また一

段の餘情をぞ添へにける。それより小き石橋を過ぎて。杖を教育博物場の前の岡に移し去れば。月は老杉老樅の末を離れて。高く八紘の天に懸り。花は瀬枝瀬葉の中より放ちて。方に十分の春を妝ふ。此の花の妝は彼の月の光に透き。彼の月の光は此の花の妝に徹りて。梁苑の雪の朝日に映ずるも斯くやあらむと想ひ俵らる。元來此處は上野櫻園の中に就て最も平衍の廣みなれば。白晝ならむには。醉客の歌ふやら踊るやら。子女の逐ふやら逐はるゝやら。喧歴雜遝の途中なるに。今夜は閑人の時に杖を曳き去るの外。また俗子の來りて境を俗了するなし。唯此の境を俗了せしものは。第三内國博覽會を司りし俗吏なりけり。彼の時此處には水産物陳列場を設けし故。二百餘年も經たりけむ老櫻を幾株となく堀り取りしは野暮なり。今は其の跡に若木を移し植ゑたれど。村女豈宮娃の

缺を補ふに足らむやなど。小言を蒔き散らしつゝ。博物館の門前を過ぎて。兩大師の門外に至り。此より路を右に折りて。華族會館の前通りを歩む。一抱半には餘らむ二抱には足らざらむと思はるゝ老櫻が。枝に苔むす老松の間に並び立ちて。今を盛りと咲き匂へる有様は。層々に色を染め分け。累々に彩を文なし出で。さながら玉瀾を碧波の上に翻へし。彩霞を翠雲の中に籠むるに似たり。嵐峽芳山の勝も是れにはよも過ぐまじと稱賛しつゝ。梅圃桃圃の中路を斜めに通りて。磨盤山の下に出で。なだらかなる阪を躋りて。上なる四阿屋の榻に兩人打ち向ひて腰うちかけて。行き暮れて木の下かげを宿とせば花やこよひの主なるらむ。なごゝ口ずさみつゝ。暫く茲に逍遙の脚を休めたり。」

是の時不思議なる哉。四阿屋の上に入聲ありけり。耳を澄まして能く聞

けば。老儒と老僧との二人とぞ思はる。老僧曰く。道春殿よ此の上野は貴殿が地を相して居を下し。それに松と櫻とを植えて。櫻が岡と名づけられしより茲に二百五十年。世易はり星移りて。天下一變しぬれども。此の岡のみは五大洲にも稀れなる公園地となりて。内外の人士が歩を移して目を悦ばしめ。駕を枉げて意を慰むると。皆是れ貴殿の賜ものなり。野僧が如き方外の身すら。春ごと此の磨盤山に呼ばれ來て。年々お手植の櫻と松との福を擧げ壽を拱するを看るも。また貴殿の餘徳なり。敢て謝すとありければ。老儒之に對て曰く。天海長老よ其は小さし。初めには明君の帷幄に參して。始めて天下の亂を戡め。後には英主の機密に與りて。永く後世の治を開く。世は既に歐米の政治に移りぬれども。民は猶仁義の徳教に頼るは。是れ皆長老が指定する所。此の賜ものこそ莫大なれ。

されば圓寂の後慈眼大師と仰がれて。日々廟食せらるれども。未だ以て從來の功德に酬いるに足らず。茲に萬民に代りて敢て謝辭を呈すと云ふ。老僧打ち消して曰く。いやとよ道春殿。其の謝辭は當らぬども。野僧つら／＼今の大臣等が君を輔佐する仕方を觀るに。我等が遣りし鹽梅と痛く違ふこそ笑止なれ。凡そ天下國家の事に二つあり。一は成るを永遠に期すべきもの。二は功を一時に收むべきものなり。功を一時に收むべきものは。機に臨み變に應じて。權を行ひ謀を用ひ。人の意表に出で。以て速功を當時に効すべし。貴殿が明君の帷幄に參して天下の亂を戡むと云はれしものは。是れなり。成るを永遠に期すべきものは。千萬世を達觀洞視して。不拔の業を創め。不朽の功を垂れて。以て大成を後世に望むべし。貴殿が英主の機密に與りて後世の治を開くと云はれしものは。是れな

り。之を機に譬ふれば。成るを永遠に期するものは經綸にして。功を一時に收むるものは緯綸なり。此の經綸と緯綸と。一を廢して機は寸分も織るべからざるが如く。永遠の業と一時の事と。一を闕て天下國家の事は片時も與るべからず。腐儒は功を一時に効すを見て。憎みて姦邪と稱すれども。聖人は之を許して權道と立てられたり。才子は成るを永遠に期するを見て。斥けて迂愚と名づくれども。聖人は之を稱して常經と立てられたり。されば此の常經の上に都合よく權道を組織して。以て上下の治安を護る。之を經天緯地の大法と云ふ。聖人が天下國家を經綸するに。未だ曾て此の大法に由らざるは無きと。貴殿も固より熟知せらるゝ所なり。然るに今の大臣等が作す所を視れば。彼の功を一時に收むる事のみを政事と心得違ひして。成るを永遠に期する事。更に政事の根本

なるを知らず。知らざるが故に務めず。務めざるが故に上は 先王より下は野僧等迄が。世を經代を累ぬる間に積み立て養ひ立たる大經大法を。支離滅裂に付し去りて。少しも顧慮する所なく。唯己が思ひ付きたる一時の事のみを仕て取らむと足摺りまはれども。是れ恰も機の經綸を散々に斷ち截りて。而して緯綸を織り出ださむとするが如し。豈織らるべき道理あらむや。其の證據には維新以來彼等が仕たる仕事を看られよ。君嚴の添はる事を一個にても仕出せしか。民福の加はる事を半個にても仕出せしか。國威の伸ぶる事を一分にても仕出せしか。子細に看來れば。二十五年間の仕事に一の見るべきもの無し。唯著るく見るべきものは道德を破壊して人心を潰亂したるの事業のみ。殊に春來の吏黨騒ぎの如きは。窮策中の最も窮策なるものにて。今は箴も梭も二進ども

三進とも通らなくなりし所にあらざや。道春殿よ我等も互が輔佐したりし當時の天下を回顧せられよ。兵亂僅かに戢りしかども。人心未だ安むせず。我が主を仇と規ひ怨と懐ふ一念は。常に天下侯伯の腦臆に存したりき。是に於てか骨肉の親藩を鼎立して其の本を強め。腹心の大藩を碁置して其の末を制し。絶えたるを繼ぎ廢れたるを興して。以て諸侯の心を攪り。租を軽くし税を薄くして。以て百姓の役を休め。賢を尊み親を親みて。以て國家の大典を定め。遠きを靡け近きを懐けて。以て天下の興望を收め。凡そ四十年間の仕事に。二百六十年間の治國を組織したりしは。随分骨の折れたる事なりき。明治維新の仕事は之に反して。戴く所の君は萬世一系の 聖天子なり。頼む所の主は人望の歸向せる大藩の賢諸侯なり。之を結びて以て人心の睽離したる幕府を仆し。二千五百年の

王化を再興して。以て三千五百万の民心を收むるは。猶砲丸に帆をかけた順風に飛ばすが如し。是の勢に乗じては何等の大業か興されざらむ。何等の大事か成らざらむ。然るに彼等は二十五年の歲月を徒費して。事業の一も見ざるべきものなく。轉た前途の行きつまりしを見る。是れ固より彼に經天緯地の學もなく。理世安民の徳もなく。畢竟一個の武人なるがゆゑに。時に逐はれ世に制せられて。其の他を顧るの違なきに由ると雖も。之れが君たる御方には。實に氣の毒の至りにて。之が民たるものには。皆も笑止の至りなり。道春殿よ今の天下を我等も互に任せたらむには。先づ四神相應の地を卜して九鼎を其處に奠め。四面には二十二の禁門を開きて近衛の兵士非常を誡め。七十二の前殿には文武の有司伺候して乾道を行ひ。三十六の後宮には賢淑の妃嬪陪從して坤徳を布き。百



官百寮は唯是れ忠を竭くし誠を盡くして、聖明を補佐し内外を綏撫すべからむものを。今の人は之に反して、昔の一朝廷を割きて政府と帝室との二つに分ち、帝室には帝室財産を供すること猶一家の私産の如く、政府には國庫の金を給すること猶一國の公費の如し。斯くては、天皇は天下の財産を分けて一家を御まつらひ遊ばして、國家の事は内閣諸大臣が負擔したるものに似たり。是れ皇國の土地人民は悉く、天祖の御有にして、人民の私有に非ざれば、天皇、天祖に代り給ひて天下を統御まします以上は、普天の下寸土も玉土に非ざるは無く、率土の濱一民も王臣に非ざるは無きとを知らざるものゝ制定する所にて、大いに我が建國の本體に背きたり。大義の勢れ名分の崩るゝ是れより大いなるは無し。野僧は此の遣り方にて押し行かば、往々、天皇は宮内省に高

御座を安じ給ひて、天下は吏黨とか民黨とか云ふ黨派者流の跋扈する所とならむと、猶公方義政將軍が東山に隱居して後に、天下は山名細川の兩黨に蹂躪せられし足利の末路の如く成り行かむことを心配して罷在るなり。現に今既に其の傾きはあらざる乎。貴殿はいかゞ思はるゝやと問はれたり。

是の時老儒枯聲をふるはして曰く、予が憂ふる所もまた貴僧の憂へらるゝ所の如し。全體予が見る所に據れば、今の政治法律も、決して良からぬ物にあらず。今の文明開化も、更に捨つべき事にあらず。俱に是れ結構なる治國の良材のみ。されば此の政治法律文明開化の目方より、今一層目方の重き人物ありて、之を左にし之を右にし、之を上げ之を下して、自由自在に運用斡旋すること、猶玉良が駿馬を御する如くならば、實に

王政を振揚して。百世を綱紀するに足らむものを。悲い哉。今は彼の政治法律文明開化の目方より一段目方の輕き人物のみ之に従事するゆゑに。其の政治法律文明開化に。逆さまに使役せらるゝこと。恰も悍馬が弱卒を乗せ回はるが如くなること。人は天地の隊長にして。心は世界の靈物なれば。自主も固より可なり。自由も固より善し。然れども彼の自主の爲に身を殺し。自由の爲に心を縛せらるゝものに至りては。いづこに自主の分劑ぶんじかある。いづれに自由の妙處かある。實に不自主不自由の至りと謂ふべし。是れ即ち自主自由といふ死理窟が逆さまに活人をつかひ回はす所以に非ずや。立憲政治もまた復然り。若し眞成に天下經綸の英才ありて。此の憲法を活潑々地に運用せば。實に立憲の隆治を致して。大に先王の大經を紹述するに足るべきを。惜い哉。天下に其の人なくし

て。却て憲法に使役せらるゝが故に。終に立憲施行第一着の腰を折りて。今は此の政治は我が國體に相應せざるものと誹譏するものあるに至る。嗚呼。今上の啟明にまします。豈我が國體に相應せざる政治を以て。之を宗廟社稷に告げ。之を天下國家に施し給はむや。正に是れ立憲の政治が國體に相應せざるにあらず。畢竟施政の人物が。憲法に相應せざるの咎なるのみ。實に殘念千萬の事なり。天海長老よ。若し互をして今の立憲政治に參與せしめなば。斷じてかゝる醜態を極めて。以て聖徳を煩はし奉らじ。天海長老よ。昔の人は參州岡崎の城主を推して。天下の征夷大將軍と守り立て。草莽々たる武藏野が原を闢いて。本邦第一の大都會と經營し。其の中央の荒蠻さむらを變して。日本無雙の金湯城と建立したり。此の忍が岡の荒涼を化して。清淨なる靈場と轉換したるが如きは。蓋し其

の餘波のみ。今の人は之に反して。一天萬乘の 大君を奉じて。態々覇府の舊都に來り。殊に尊嚴を天下に表すべき禁闕は。僅かに幕營西丸の故墟に據りて造りたり。そも此の西丸は徳川世子の住する所。將軍すら之を小なりとして居らざりしものに非ずや。此の上野の如きも。帝國博物館と云ひ。教育博物場と云ひ。圖書館と云ひ。動物園と云ひ。或は帝國博覽會と云ひ。皆貴僧等が經營せられし佛場の片隅かたすみを借りて開始建立す。詩に曰く。維鵠これかき、び巢あり維鳩これぼとこれに居ると。夫れ鵠は大にして鳩は小なり。小なるを以て大なるに就く。婦人の夫に嫁するに比する所以なり。今鵠をして鳩の巢に居らしめばいかん。是れ鵠をして鳩たらしむるものに非ざる歟。古人曰く。我が君をして堯舜にすること能はざるものは。君を賊そとこふものなりと。堯舜は姑く置く。一天萬乘の 大君をして。家康公家光公

たらしむること能はざるものは。其れ之を何とか謂はむや。嗚呼天下の形勢斯くの如く危殆に。天下の人物斯くの如く汚下するに。輦轂の下巖穴の中。また一人の之を愛ふるもの無き乎と。老僧笑を帯びて曰く。天下豈其の人無からむや。唯時を得ざるのみ。中に就て尤もをかしきは。都下に如々道人と號するものあり。大いに時勢の變を憤りて。深く國家の事を愛ひ。單身之に當らむとするの志は。飽くまで大いなれども。才は頗る疎に。赤手之を支へむとするの心は。洵まことに潔けれども。智は極て短し。みづから其れを知りながら。少しも屈托せず。勇往奮進して其の分を盡さむと熱中するが故に。春來は些の所勞を感じたり。是れ他なし彼れ天保錢を百文に使はむとするからに。みづから二十文だけの過息を受くるのみ。人情滄薄の今日に在りては。愛すべき一狂生なり。貴殿は之を知らざ

る乎と云ふ。老儒首を傾くる體にて答て曰く。憶ふに其の男は六七年前までは。屢々予が大成殿に上り來りて。經書を読みし老書生ならむ。精神は假令健氣なるも。彼れが如き寡學淺識の器。何ぞ天下國家の用に立たむ。長老が指折りに數へ入れらるゝこそ奇怪なれど。老僧曰く。遺春殿よ左は言はるゝな。彼れ六七年來我が佛法を修行して。多少の膽を鍊り得たれば。愚物ながらも。兩脚大地を踏み行けり。他の腰を折りて西洋を崇拜し。鬚を燃りて英雄を模擬する智者に比すれば。また幾分かの取り所あり。忠愛の一狂生と許すも。何の不可かこれ有らむ。唯憐むらくは。老僧彼れが面體を觀るに。金櫃玉匣齊しからず。相書に曰く。金櫃玉匣の齊しからざるは。年四十六七にして大難あるを主とると。されば明治廿六七年の内には。彼れ必ず大難に罹らむ。若し幸にして之を免かれ。賊を喝し

て懈らざれば。或は國家に補あらむ。貴殿よ無下に彼れを勿捨て給ひそと云ふ。」

是に於て老儒口を開かむとする折柄。惺々道人遠しく如々が膝を抓て曰く。嗚呼夢なりしか。現なりしか。予は此の屋上の談話を聞かざるかと。如々道人曰く。皆聞けり。然れども其の夢なるか現なるかは。余もまた未だ知らざるなりと。惺々は眉を蹙め聲を顛はして曰く。嗚呼案外なる處に長居して。不祥の事を聞きつるもの哉。予が進まば共に進み。死なば共に死なむと誓ひし友は。即ち子に非ずや。されば子の命數の將に盡きなむとすることを聞くことは。なほ予が命數の將に盡きなむとすることを聞くがごとし。之を如何にぞ感まさらむや。嗚呼愉快なりし半宵の逍遙も。今は烟と散り去りて。面白かりし先刻の談話も。今は泡と消え失せ

ぬ。嗚呼底氣味悪し。いざ歸りなむと云ひて。椅子を離れて跣立せり。如々は慍々が衣の袖を控へて。元の椅子に憑らしめて。笑ひながら語て曰く。子は論語を讀みながら。朝に道を聞て夕に死すとも可なりといふ語を會せざる乎。暫く坐せよ。余子が爲に説かむ。夫れ人には生老病死あれども。道には生老病死なし。されば道は天地剖判の以前より。天地壞滅の後までも。唯一條に流行するのみ。若し人朝に此の道を聞て。心斯の道と契ひなば。既に生老病死を離る。夕に死すとも死するに非ず。賊に其れ可ならずや。余は既に斯の道を聞きたれば。來年はあるかの事。今夕只今茲にて死すとも遺憾なし。余は此の世に在りてほしいまゝに口業を造りたれば。一息截斷の夕には。道と與に流行して。必ず地獄に往生せむ。幸なる哉。地獄には未だ吾が大道社員のあらざれば。往生の手始に。先づ閻魔の

爺々を特別員に誘導し。牛頭馬頭の獄卒をば隨喜員に隨喜させむ。次に囚獄の片隅を借り受けて。大道社の出張所をしつらひ。黒鐵の春を買ひ入れて。印刷器械に引直し。余は之が記者となりて。大道叢誌を發行せむ。閻魔の爺々叢誌を點檢して。此は公共の性質に不完備なれば。第三種郵便物には認可せむと目玉をむかば。壹錢や壹錢五厘の郵税に僻易して。口を閉ぢ舌を結ぶの腰拔にはあらじ。大道社員の膽玉看よとて。貳錢の切手をベタ／＼と貼用し。其の代りには。直言直筆を縱横にして。思ふ存分に正法輪を轉じ。八萬地獄の億萬の衆生に。日本男兒の活膽を食はせてむ。扱又情倦み體疲るゝ時は。油の釜の風呂に入りて。娑婆の垢を洗ひおとし。淨玻璃の鏡に對して。立てかけの後れ髪を結ひあげむ。支度も出來なば。遠くは千八百六十三年前に。猶太の十字架を脊負はせられて。眞

逆さまに墮ち來りたる耶穌先生に說法して天國に濟度して取らせ。近くは三四年前に我が皇國大臣の横腹を刺りたり。飛足をもぎたりしたる亂暴書生を説得して高天原に救ひ上げて遣はさむ。猶日間あらば、劍の山の櫻狩に出かけて息促き捲きて逐ひ詰めらるゝ亡者の縛を解かむこと。猶春風の落花を吹くが如くせむ。又或時は血の池の蓮見に物して腕き掻きて溺るゝ衆生に樂を與へむこと。猶菰片の池水に浮ぶが如くせむ。猶餘暇あらば火の車に打乗りて牛頭の鬼を前挽きに挽かせ馬頭の鬼を後押しに押させて八寒八熱千萬無量の地獄の隅々隈々までも巡廻し。大解脱大安樂の大法を。地獄のドツ底より擴張して閻魔の爺々や鹽塚の婆々が仕事を取揚げて遣はさむ。道と與に流行して。又も此世に生れ出でなば神儒佛の力に藉りて必ず天下太平皇祚無窮の基を

定め花靜かなる黄昏月暈なる夜半に。再び東台の花見に出かけて。大道叢誌の社説を。櫻雲深き處に思ひ構へむ。あな愉快の地獄の仕事や。あな面白の娑婆の洒落や。往かば子と共に往き來らば子と共に來らむといひて。呵々として大笑したり。惺々も苦笑ひして曰く。去年の花辰には。芳野の花に吟じて。喜藏院の書院にて。子の横鎗を一本受けたり。今年の花時には。東台の月に嘯きて。磨盤山の四阿屋にて。また子のお面を一本戴きぬ。花見のまん悪し。いざ歸りなむといひて立つ。如々も共に去りて。櫻雲臺の上より南に向へば。月は大都の中天に懸りて。千代田の皇城光輝赫灼たり。

○嵐峽看花記

穆々惺々如々無々の四道人は。眞に異體同心の人なる哉。花の朝。月の夕。

雪の曙霞の黄昏。苟も賞心の動くことあれば。必らず逍遙の杖を共に曳かざるは無し。今茲甲午の春も。共に洛東の一得庵に在り。折しも四月十一日。昨日今日なむ。嵐山の花盛りと聞くからに。いざ往きて看むとて。亦四人袖を聯ねて出で。三條の大路を。西に向ひて進むほどに。早郭外に出でぬ。紅塵の中より脱れ出で。青眼を打ち開けば。萬頃の田の而は。麥の緑と。菜花の黄と。縦横に相區畫て宛ら華筵を敷きたるが如し。其の黄と緑とを限れる畔の面には。紫雲英。蒲公英などの。時を得がほに。眼の及ぶ限り。咲き出でたるも憐れなり。さて向ふを看わたせば。一帶の西山。翠を凝らして環り立てる中に。嵐山の花はほのくくと。霞の間より見え隠れて。恰も高殿の美人が。小簾の中より手招きするの風情あり。振り返りて。來し方を眺むれば。東山の一帶は。猶青樓の佳人が。朝に郎を送りて。きぬ

ぎぬの別れを惜むに似たり。中に就て清水寺の地主の櫻。眞葛原の姥櫻。(俗に謂はゆる祇園の垂絲櫻。雙林寺。長樂寺邊の美種。知恩院。青蓮院内の名花は。着飾れる打掛の模様と見えて。亦一段の愛嬌あり。其の他。右は平野御室太秦等の紅より。左は竹田烏羽伏見邊の翠まで。都て眼界に入り來りて。四人が賞心の樂事とならざるは無し。穆々道人は。此の風光に心の花や綻びにけむ。澀り聲にて語り出で。曰く。予つらく平安城の地勢を觀るに。比叡愛宕の兩嶽は。其の良と乾とを守り。宇治天王の二山は。其の巽と坤とを護し。北には鞍馬の靈山あり。南には男山の神山あり。東には糺川の清流。(俗に謂はゆる加茂川。是は加茂神社の御手濯より流れ出づるが故に。然か云ふなり。)洛中洛外を堺ひて。溶々と南に注ぎ。西には大堰川の清瀾。(俗に謂はゆる桂川。是は愛宕山の七八合目より見さくれ

ば。此の流れ自然に平假名のかつらの三字形を成せるが故に。斯くは名づくるとぞ。王城の溝渠となりて脈々と南に流る。實に名山勝水の靈。四方八方を取りよろひて。古歌に謂はゆる。山川の神も寄りて仕ふる君が御座處にぞありける。憶ひ起せば延暦の昔。大納言藤原小黒麻呂。左大辨紀古佐美。大僧都賢琛等が。桓武天皇の勅を奉じて。山背國萬野郡宇太村の處は。最上の地にして。四神相備はれり。新都を奠むるに宜し。と鑿定せし活眼こそいみじけれ。眞に天然自然の王城なる哉。四神とは。左青龍。右白虎。前朱雀。後玄武なり。東に流水を通じ。西に森林を控へ。南に田圃を開き。北に丘陵を負ふを。四神相應と云ふ。是れ謂はゆる最上の地相なり。然るに今は之を棄てし。山川の神をして。寄りて仕ふるの君なく。風流の客をして。山河寂寥。千載誰と賞せむの歎あらしむるは悲い哉。されば明

治遷都の初に。宮子てふ妓女は。

かすみ立つ春の八重やまふみ分けて。微をるべきときは來にけり。と云ふ歌一首を詠み遺して。今に行方知れず立ち去りしとなむ。嗚呼。はいかなる女流ぞや。當年既に今日の成行を看破して。遠く首陽山下に古人と隨逐す。其の操の潔く。其の見識の氣高きこと。なかく。吾等の及ぶ所ならむや。など。頑言を吐き散らしつゝ行く。惺々もまた意見ありと見えて。何か言ひ出でむとせし間に。彼の彈正大弼仲國が。仲秋月の明らかなる夕。高倉天皇の密旨を奉じて。龜山のあたり。小督局を捜し來り。想夫戀の名曲を。馬を立て。聞きたりしと云ふ。琴聽橋の上。にぞ至りける。

是れよりあなたは。嵐山の對岸にて。車馬の轂を環ち合ふ。士女の肩を摩



り合ふ。其の雜選言はむ方なし。されば其處には歩を移さず。直に渡月橋をわたる。橋の中程に杖を停めて。嵐峽の勝槩を看わたせば。青山の重疊せると。碧水の屈曲せると。互に映帶して。一仙區を成せり。况て老松の峙ちたる木の間の櫻は。宛ら彩雲の棚引きたるが如く。峰巒の聳えたる山の端の花は。恰も玉淵の打ち寄せたるに似て。其の眺望言はむ方なし。流石の穆々も之に對しては。小言の種子をや奪はれにけむ。莞爾として歌ひけらく。

來て見ればこゝろにかゝるうき雲も。いまはあらしの山さくら花。京都の俗には。兒童十三歳になりぬれば。必らず嵐山の邊なる。法輪寺の虚空藏尊に參詣せしむる習ひあり。號して十三參と云ふ。今日は別て日かげも麗かなりければ。妙齡の女子を。花のやうに粧はせて。親人が引連

れつゝ。是れ見よがしに往き交ふ状のいと愛らしきを見て。無々道人が。山ざくらなれもうるはし。されどまた物いふ花のめづらしきかな。と事もなげに歌ひてければ。如々は大笑して輿に入る。惺々は先程より唐歌の一首も拈り出さまじとや思ひけむ。小首傾けて立ちたりしが。此の洒落に驚かされて齊しく一笑しつゝ。橋を過ぎて。花の下路を北にたどり行く。先に雲と望み瀾と眺めし櫻は。今は皆かざしの花となりて。又別段の風致あり。其中早咲の分は。蝶と飛び雪と飄りて。篋の塵と消え行くも潔し。如々は此の情をや看取りけむ。うらやまし。さそふともなき春風に。おのがまに。散るさくら花。と低聲にくり返へしつゝ。口ずさみて。戸無瀬の灘を過ぎ。芭蕉が道しるべを経て。大悲閣に登る。閣は惠心僧都の作れる千手觀音を安す。一拜佛

を背にして庭上に立ちつらく來處を眺望すれば。洛中洛外の嵐光風色より。脚下の水紋潭影まで。悉く收めて雙眸の中に在り。更に右に首を回らせば。嵐山の花の吹雪は。頂上より吹きおろし。不動の瀧の遠雷は。地下に響きわたりて。恍として人寰を出でたる想ひあり。惺々道人は。是の時詩腸や開けしむ。夷びたる聲にて。外聞も憚らず。

大悲閣上望無窮身立宛然圖畫中。飛瀑紛々雪逾亂山頭吹下落花風。

と吟じ出でければ。みなく惺々が喉に懸けたりしものを。首尾よくぞ吐き出でつる。と笑ひどよめきつゝ。山を下りて川の邊に出づ。川の邊には。數多の舟子等が。小舟に客待ちして。口々にいさ打乗りて。奥む給へど云ふ。四人も今は水に泛びて。看残せる花をや看むとて。一艘を買ひて乗る。中流に出づるに。隨ひて。山の花の漸々に見え出づるも。面白し。四人は

之に見取れつゝ。少し下れば。處狭きまで。花見の客が舟を浮べて。清樂を合奏するあり。俗曲を亂打するありて。中々にうるさし。時に隣の舟に。酒に酔ひたる爺々が。震ひぬる手に。盃を持ちながら。纏るゝ舌にて。酒なくて何のものれが櫻かな。と。饒舌るを聞きて。滑稽の無々が透さず。酒に酔ひて何のものれが花見哉。と。鸚鵡返へしに洒落しは。餘程をかしかりき。斯る處に何物の俗見か。一舟に笛太鼓鉦を鳴らし。ドンチキチンと云ふ。囀をはやし立て。此の中に衝き來しは。其の殺風景云はむ方なし。惺々は。やがて舟子に命じけらく。吾等は此の仲間に入らむと情なし。早々上流に棹さし去れど。舟子曰く。此の上流は保津川と云ふ。溪險しく水駛し。遡るべからず。幸に傍流あり。清瀧川と云ふ。此の川從來筏のみにて。未だ曾て舟を通せざりしが。此の頃開鑿して。始めて通ず。今や溪の曲山の間

の花も定めて満開ならむと云ふ。さらばとて其れに遡る。棹一轉して境も亦轉じ寂にして幽なること。殆ど武陵の漁夫が風情あり。四人は大いに其の情を得て。背には嵐峽の霞を顧み。向ふには愛宕山の雲を望み。左右には溪の曲々山の間々の花を眺めつゝ。いつの間にか清瀧村に着きぬ。

清瀧村は愛宕山の麓に在り。川に架し山に縁りて家を作る。恰も桃源の趣あり。時に長き日かげも。早西に傾きて。愛宕の半山は既に夕陽を帯びぬれば。今宵は仙境の夢を結ばむとて。舟を返へして。升屋と云ふ旅宿に投ず。宿の妻道人が風流の體を見て。良き室こそ侍れ。いざ是れへと。奥庭に導きて。川に臨みたる小亭に案内す。清瀧川の水聲。心耳を洗ひて。清々し。四人は夕餉を食べ。澡浴を畢へ。茶菓を喫して。稍まどろみける處に。大

の力士二人。突然と入り來り。道人を楯して曰く。愛宕の大神足下等を召す。速かに來ませと。道人曰く。召されざるも。明朝は詣でむとす。今夕は遅し。去て此の旨を傳へよと。力士曰く。嚴命あり。明日を俟たずと。曰く。然らば。則ち身を拵へて出でむと云ひ。さま。無々は中に立ち。慍々は前に依り。如々は後に付き。穆々は其の上に乗れば。忽ち一人の丈夫となりて。四肢五體復た其の繼ぎ目。合せ目なし。力士見て驚て曰く。足下は是れ何者ぞと。道人笑て曰く。首を穆々と云ひ。腹を慍々と云ひ。背を如々と云ひ。手足を無々と云ふ。即ち愛宕の神が召す所の者なり。直に案内せよと。力士懼る。前後に従ひ去る。是の時身山を離れず。足地を履まざるに。須臾して。頂上の處に至る。頂上は平かにして。廣く。老杉外を圍み。芳草中に鋪きて。清淨なると神界の如く。明かなると白晝に似たり。正面に門あり。舊内

裏の承明門の如し。右に回れば又門あり。月華門の如し。力士道人を揖して入る。内に殿あり。其の形容莊嚴。一に紫宸殿に似たり。力士右階より道人を進めて。身は階下の左右に伺候す。道人殿に升れば。向ふに上座あり。中に翠簾を下し。左右に錦幌を垂る。幌の前に侍臣あり。衣冠劔を帶ぶ。下坐に席を設けて。予を待つが如し。道人乃ち之に著て。一禮して曰く。賤人は大神の召す所の者なり。敢て使者に伴ひて至ると。是の時簾のづから揚りて。神即ち現はる。衣冠美しく装ひて。劔珮嚴かに飾り。手に羽扇一柄を把りて。眼光炯々人を射る。即ち道人を詰りて曰く。今夕我れ四人を召す。然るに汝一人となり來る。是れ神を愚瞞するものに非ずやと。道人答て曰く。賤人敢て大神を愚瞞せず。大神みづから自己を愚瞞し給ふのみ。今大神の御面を見上るに。御眼あり。道家には之を炯々童子と云ふ。其

の脇に御耳あり。道家には之を突々童子と云ふ。中央に御鼻あり。道家には之を洞々童子と云ふ。其の下に御舌あり。道家には之を灼々童子と云ふ。今大神是等の童子を集めて。自己の御首とし給ふことを。答めずして。却て賤人が穆々を首とし。惺々を腹とし。如々を背とし。無々を手足とし。たるを。答め給ふは何事ぞや。今賤人の此の拳の中に。無位の眞神あり。之を放てば。即ち大神の眼より鼻に抜け。鼻より耳に抜け。耳より口に抜け。口より尻に抜けて。大神の五體を。縦横自在に出没上下す。然るに大神恐らくは躬づから之を知召されざらむ。是れ自己を愚瞞し給ふものに非ずして。何ぞやと云ふ。神忽ち眼を張り。臂を怒らして曰く。黙れ道人。汝みづから敬神勤王報國の士と稱しながら。神を侮り。君を輕む。國を惑はすは。其罪重し。我が召して詰問する所以なり。説あらば辯じ看よと。道人

敢て問て曰く。賤人愚にしてみづから其の三大罪を犯し、とを覺えず。大神願はくは誨へ給へど、神即ち羽扇を叩いて詰りて曰く。即今我に對して慢言を吐く。是れ神を侮るに非ずして何ぞやと。道人聽て答て曰く。神に二種あり。正神と邪神となり。貪瞋痴慢を恣まゝにして。我意私心を振廻ふ。之を邪神と云ふ。素戔嗚命の初めの如し。小人は之に媚ひ諂ひて。僂伴を求むれども。君子は爲さざるなり。天地の心を以て心とし。造化の意を以て意とし。仁愛慈祥の徳のみ有りて。我意私心の痕だにも無き。之を正神と云ふ。天照大神の如し。君子は之を敬し之を奉じて。而して夫の邪神の如きは。方の限り之を濟度せむことを務む。昔し素戔嗚命は。一朝の慢心より。瞋て兇暴を恣まゝにして。邪神の群に陥り給ひしかども。後八岐の大蛇を退治して。吾が心清々しと宣ふに至りては。復優に正神に

還らせ給ふ。是れ素戔嗚命の尊神に坐ます所以なり。賤人つらく大神の御外貌を見上るに。眼光り鼻高く。唇尖り肩怒る。また御内部を伺へば。八岐の大蛇ありて。胸腹の間に蟠る。是れぞ貪瞋痴慢の時々。亢らせ給ふ所以なりける。數多の御眷屬中に。此の四種の凶徳を。助け長ずる神は。あれども。彼の八岐の大蛇に。一刀を下す人なし。是を以て大神の威福は。日々に盛むにして。其の神徳は夜々に衰ふ。賤人之を悲むが故に。此の苦言あり。あはれ大神よ。赫と一たび怒りて。此の大蛇を退治し給は。直に御心清々しく成りて。優に正神の列に進み給はむ。賤人之を希ふが故に。此の慢言あり。然らば則ち賤人の慢言苦言を呈するは。最も大神を敬愛して。措かざる所以に非ずや。伏して請ふ此の意を。諒察せられむことをと云ふ。

神即ち端を改めて又詰りて曰く汝春來京都に在りて竊に銀婚式を非議せり。夫れ銀婚式は。陛下の裁可し給ふ所之を非議するは。君を輕むざるに非ずして何ぞやと。道人謹て答て曰く。陛下は神聖に坐まして決して侵し奉るべからず。故に國務大臣は。陛下を補弼し奉りて一切國事の責に任ず。されば國事に不可なることあらば。是れ大臣其の人が補弼の道を誤るものなり。官責ある者は之を諫め。言責ある者は之を規さるべからず。是れ最も君を重むし奉るの道なり。謹て憲法御發布の聖勅を拜讀するに。

(上略) 朕我が臣民ハ。即チ 祖宗ノ忠良ナル臣民ノ子孫ナルヲ回想シ。其ノ 朕ガ意ヲ奉體シ。 朕ガ事ヲ獎順シ。相共ニ和衷協同シ。益、我が帝國ノ光榮ヲ。中外ニ宣揚シ。 祖宗ノ遺業ヲ。永久ニ鞏固ナラシム

ルノ希望ヲ同クシ。此ノ負擔ヲ分ツニ堪フルコトヲ疑ハザルナリ。』と宣らせ給へり。然らば則ち帝國の光榮を宣揚し。御祖宗の御遺業を鞏固にするの務めに至りては。臣民一般之を負擔して。以て 聖慮を安め奉らざるべからざるをや。微臣謹て國典を按ずるに。神武天皇以來。立后の大典を擧げさせ給ふを聞く。未だ結婚の大禮を行はせ給ふを聞かず。夫れ結婚とは。兩姓好みを結ぶの謂ひにて。臣民の事のみ。陛下は至尊にして。絶對に坐せり。是の故に賢妃御入内あれば。先づ女御宣下ありて。女官の員に充て給ひ。其の淑德現はるゝに及びて。乃ち 皇后宣下あり。是の時 皇后陛下は。始めて坤德を備へさせられて。天下の人の母儀たる御位に即かせ給ふこと。猶 天皇陛下の御即位の御時。始めて乾德を備へさせられて。天下の人の父表たる御位に即かせ給ふと一般な

り。昔し神武天皇の都を大和に奠め給ふや。事代主神の女。媛。陷。輔。五十鈴。媛。命。を納れて妃となし。其の翌年に立てし皇后とし給ひしより。今に至るまで。渝ること無し。是れ聖勅に宣らせ給へる。我が帝國の光榮にして。御祖宗の御遺業に非ずや。然るを之を以て稱せずして。臣民普通の結婚を以て稱せらる。今夫れ臣民の稱を以て。至尊に移し奉らむ端緒を開かば。後世恐らくは。御降誕をも御出生と唱へ。御即位をも御家督相續と稱するが如き亂暴者を出さむ。名分の壞れ。大義の崩る。は國の亂階なり。霜を履て堅氷至る。傲臣實に驕を呑みて。晏天に號泣せざるを得ざるなり。大神何ぞ起て之を救はざると云ふ。

是の時大神居丈高に立ちあがり。皆を裂て道人を睨みて曰く。頑固なる哉。此奴よ。汝今を師とせずして古を學び。古を是として今を非とし。枉げ

て勅語を引て。我を願使せむとする段。無禮傲慢不届至極なり。階下に誰かある。此奴を京都の市に引き往きて生きながら抗にせよと命ず。是の時門外に聲ありて。加茂兩社の使者至ると告ぐ。力士は即ち左の日華門に迎へ。左右の侍臣は。殿の左階に立ち。愛宕神は座を避けて。肅然として待ち給ふ。間もなく二名の神人入り來る。一は御祖神社の使者。謂はゆる下加茂。一は別雷神社の使者なり。謂はゆる上加茂。兩神齊しく束帶劔を佩び。裾を曳て賓席に着く。其の容貌威ありて。狂からず。恭くして氣高し。愛宕神慙慙に禮して曰く。兩社の御使。何の誨へ給ふ所かある。謹て大命を聞かむと。兩神少しく纓を傾け。笏を正して傳へて曰く。大神の其れなる者を呵責し給ふ聲。吾が神の耳邊に達す。故に遠しく使を馳せて意を致す。此の者性愚直にして。世に誦はざるからに。邪神には容れられざれ

ども心正直にして天を畏るゝが故に。正神には捨てられず。既に銀婚式の當日も。衣は雨に濡され。裳は泥に汚されながら。吾等が社頭に参詣でて。丹心赤誠に。兩陛下の聖壽萬々歳を禱り奉りて。終に一片の私言。一念の私心を雜へず。其の額突き拜む間に。滴れる涙は。實に肺腑の底より出でぬ。此の誠心は。天地に通じ。神明に感じて。吾等も殊勝に存じたり。之を彼の生意氣に酒を飲み肉を噉ひて。大典を濫祝せしものに比すれば。其の淺深純駁果して如何ぞや。然るに大神一旦の怒りに乗じて。誅を加へ給はし。恐らくは大神の御爲に悪からむ。故に敢て此の意を致すと。愛宕神頓首して。曰く謹て大神の大命を拜し。併せて兩神の御苦勞を謝すと云ひて。侍臣をして左階の下に。力士をして日華門の外に送らしむ。是の時愛宕神と道人と。兩顔相對して。暫くは默然たり。

頁ありて。愛宕神端を改めて。又詰りて曰く。汝みづから報國の士と稱しながら。動もすれば頑言固論。以て今日開國進取の國是を沮む。國を感はずものに非ずして何ぞやと。道人謹て答て曰く。賤人平生時事を談ずることを好まず。如何にとなれば。大言放語。豪壯を一世に衒ひて。以て下民を煽動し。惡口雜言。恩讐を一時に快くして。以て上流を刺傷するが如き。壯士者流と混じ易きを懼れてなり。今誤りて大神の詰問を承く。然れば則ち不本意ながらも。之に答ふるの辯論を進めざるべからず。大神幸に之を聞召せ。今大神は開國進取を以て。今日の國是と宣はせ給へども。賤人は謂へらく。此れは是れ吾が國萬世不易の國是なりと。開闢以來何れの世何れの時か。開國進取の國是に非ざる。今略して胸臆に存するものを擧ぐれば。開國の初め。皇祖天照大神の。皇孫瓊々杵命に。



豊葦原ノ瑞穂ノ國ハ吾ガ子孫ノ權々王ト坐スベキ地ナリ。爾皇  
孫命就キ坐シテ知シ召セ行キ給ヘ寶祚ノ隆エ坐サンコト。當ニ天  
壤ト窮リ無カルベシ。」  
と詔り給ふが如きは開國進取の國是の由て起る所なり。皇宗神武天  
皇の。

東ニ美地アリ青山四方ニ周レリ。謂フニ彼ノ地ハ必ズ以テ天業ヲ  
恢弘シ天下ニ光宅スルニ足ルベシ。」

と詔らして天業を大和に開基し給ふが如きも開國進取の國是に非ず  
や。降て崇神天皇(人皇十代)の道主を四道に遣はして四方を經營せし  
め(當時全國を四道に分つ故に世號して四道將軍と云ふ)皇子豐城命を  
して東國を治めしめ給ふが如き。是の時任那の國始めて朝貢せり。景

行天皇(人皇十二代)の熊襲を親征して西海を平らげ給ひ其の再び叛  
くに及びては皇子日本武命を遣はして之を誅戮せしめ給ふが如き。又  
武内宿禰をして東北を觀察せしめ日本武尊をして東夷を征伐せしめ  
給ふが如き。神功皇后の新羅を征伐して遂に三韓を統治し給ふが如き。  
(三韓是れより朝貢せり) 齊明天皇(人皇三十七代)の阿部此羅夫をして  
東夷を巡撫せしめ府を後志に置いて肅慎を征代せしめ給ふが如き。肅慎  
渤海の國是れより朝貢す。今の滿州の地是れなり。後一條天皇(人皇六  
十八代)の女眞の賊を討ち退けて永く覬覦の念を絶たしめ給ふが如き。  
(女眞の賊世に刀伊の賊と稱す。此の國後號を金と改めて契丹を亡ぼし  
終に宋の半國を奪ひしかども再び吾が邦をば伺はざりき) 龜山天  
皇(人皇九十代) 後宇多天皇(人皇九十一代)兩朝の間に執權北條時宗が

元の使を劄て問罪の師を出さむとせしが如き(彼れ忿怒して我れより先きに寄せ來しかば神風起りて十萬の賊を一夜の中に殲したり是れより元再たび吾れを伺はず)後陽成天皇(人皇百七代)の朝に關白豊臣秀吉が朝鮮を伐ちて威を明國に震ひしが如き。明正天皇(人皇百九代)の朝に將軍徳川家光が島原の賊を誅して外國人をして日本人に三眼ありとて憐憫かしめしが如き。今上天皇の。

朕不肖ト雖モ。列聖ノ餘業。先帝ノ遺意ヲ繼述シ。内ハ列藩萬姓ヲ綏安シ。外ハ國威ヲ海外ニ耀サシ。事ヲ欲ス。

と詔らして親征の敵断を決し給ふが如きを看給へ。權を外國に懷かせ給ふ。列聖もなく媚を外人に獻せられし先賢もなし。何れの世何れの時か。開國進取の國是に非ざる。大神猶之を疑ひ給は。左の國典を聞召

せ。年毎の祈年。月次の祭に。天皇が。皇祖に祈らせ給ふ祝詞に。

皇大御神ノ見霽カシ坐ス四方ノ國ハ天ノ壁立ツ極ミ。(天ノ覆ク限リノ意)

國ノ退立ツ限リ。(地ノ載スル限リノ意)青雲ノ靄ク極ミ。白雲ノ墮坐向伏ス

限リ。青海原ハ棹花干サズ。舟ノ艦ノ至リ留ル極ミ。大海ニ舟滿チツ

マケテ。陸ヨリ往ク道ハ。荷ノ緒結ヒ堅メテ。巖根木根履サクミテ。馬

ノ爪ノ至リ留ル限リ。長道ノ間ナク立チツマケテ。狭國ハ廣ク。嶮國

ハ平ラケク。遠國ハ八十綱打掛ケテ引寄スルコトノ如ク。皇大御

神ノ寄サシ奉リ給ハ。荷先ハ。皇大御神ノ大前ニ。横山ノ如ク打

積置キテ。残りヲ平カニ聞看ム。

と宣らせ給ふが如きは。證據の最も昭明なるものに非ずや。然らば則ち吾が神武大勇の國體を護り立て。吾が忠孝節義の國風を養ひ成して。此

の開國進取の國是を執るは。皇祖 皇孫の聖謨にして、萬世不易の國是なること知るべきのみ。然るに近來世に一流の政略家あり、吾が國體を省みずして、濫に法を歐米に摸し、吾が國風を蔑して、却て媚を外人に獻じ、彼れが歡心を買て、以て我が獨立を圖るを、開國進取の事と爲し、此の政略に反するものを目して、開國進取の國是を沮むものとなせり。賤人謂へらく、夫の大言放語、豪壯を一世に衒ひて、以て下民を煽動し、惡口雜言、恩讐を一時に快くして、以て上流を刺傷するが如きは、固より開國進取の國是を沮むものなり。然れども本を輕むじて、末を重むじ、内を疎むじて外を親み、一時の小成を求めて、百年の大計を忘るゝものに至りては、亦是れ開國進取の國是を沮むものゝみ。或人之を稱して、開國被進取の政略となす。如何にとなれば、國を開きて彼れに進取せらるればな

り。然りと雖も、此れは是れ人間社會の事、凡俗者流の業なれば、猶恕すべし。今大神の語氣を承るに、亦彼の被進取の略を以て、進取の事となし給ふに似たり。是は實にけしからぬ事なり。嗚呼噫嘻、文明開化の狂風は、人間より神界を一通しに吹き暴らして、神々の時論も、亦斯くの如く顛倒し畢れる歟。宜なる哉。加茂大神の氣を揉ませ給ふこと、云ひて、覺えず首を低れて大息せり。

時に愛宕神、怒れる髮冠を衝き、睨める皆豎に裂け、滿面に朱を濺いで曰く、傲慢なる哉。此奴、汝加茂大神の威光を頼みて、我を開國被進取の者と嘲る。縱し然らば、汝が謂はゆる被進取者流が、果して彼れに進取せられし確證を擧げよ。未來の事は想像なり。以て證據となすべからず。知らず過去に於いて、いつれの土をか取られたる。いつれの地をか奪はれたる。

言下に其の確證を擧げよ。若し擧げずば、汝が首は忽ち電光一閃の下に  
 飛ばむと云ひて起たれたり。道人笑を含みて答へていはく、太田道灌の  
 歌に。

かゝるときさこそ命の惜からめかねて無き身とあもひ知らずば。  
 とは能くも詠ぜしもの哉。併し此の首一たび飛ぶときは、再たび物言ふ  
 こと能はざれば、首ある間に、御所望の確證を陳ぜむ。大神儘かに之を聞  
 召せ。昔し嘉永六年に、亞米利加の船、始めて浦賀に來り、其の翌年に、露西  
 亞の船、尋で大阪に到る。是の時に方りて、徳川覇府は、吾が國體を忘れて  
 大に權を外國に懷き、吾が國風を貶して、却て媚を外人に獻じ、彼れが歡  
 心を得て、以て我が國安を持たむとの謂はゆる開國被進取の國是を取  
 りて、露米蘭英佛等の條約を締結し、是は安政六年の事なり。遂に治外法

權の國權と、海關稅率の國利とを、併せて外國に進取せられたり。之を爾  
 來三十六年の今日まで、確乎として、振げざるの活證據となす。然るに維  
 新以來、此の條約を改正して、國權國利を取復さむと企るものも、亦猶權  
 を外國に懷いて、却て吾が神武大勇の國體を護り立つるものを、忌み、媚  
 を外人に獻じて、倒さまに吾が忠孝節義の國風を養成するものを、斥け、  
 覇府が執りし被進取の國是を執りて、而して覇府が進取せられし國權  
 國利を取復さむと圖るは、甚だ不都合千萬の所作なれども、是れも亦人  
 間社會の事。凡俗者流の業なれば、猶恕すべし。然るを大神までが、此の腰  
 拔の腰を押して、而して 皇祖 皇孫の聖謨にして、萬世不易の國是な  
 る。眞個の開國進取の主義を執るものを、惱め、窘め給ふは、恐らくは大神  
 の御爲に悪からむ。斯く申さば、大神は、又加茂大神の威光を頼みて、その

言葉を借ると宣ふべけれども、賤人は謁するの初より叱らるゝの只今  
 まで。一念を動せず。一語を激せず。其の心の平かなること。波たゞざる淵  
 の如く。毫も加茂の神使の到ると到らざるとに關らざるなり。之を賤人  
 が養ふ所の平旦の氣となす。伏して請ふ大神も。此の平旦の氣を以て。賤  
 人が陳ずる所の是非得失を鑒み給へと云ふ。」

是の時神は何思ひけむ。稍面色を和らげて曰く。汝巧みに辯を奮ひて。己  
 が非を掩ひ。却て其の非を我れに回向せむとすれども。我れに詰問すべ  
 き事あり。いざ明白に答辯せよ。汝法を聖人に誦して。屢々今日の國事を  
 非議す。然らば則ち汝に天下を委ねなば。必ず誓ひて三代の治を致さむ。  
 其の治を致すの法を。一々我が前に陳ぜよ。我れ賊に汝が治法に悦服し  
 なば。汝は眞に勤王報國の士なり。我れ改て汝を敬愛せむ。汝我れを悦服

せしむること能はずば。汝は即ち大言放語。以て下民を煽動するの亂民  
 のみ。惡口雜言。以て上流を刺傷するの賊臣のみ。我れ即ち汝を劓て。立ど  
 ころに亂賊のものを誅せむ。速に言へ速に言へ。道人從容として答て  
 曰く。天下は公器なり。治法は公道なり。されば斯の事は。公義公心を存す  
 る人の處に語るべし。私心私情を逞うする者の前に談ずべからず。其は  
 談ずるも。害ありて益無ければなり。此の義は御免を蒙るべしと云ひけ  
 れば。神即ち勃然と赫怒して。劔の櫛取り搯り。席を蹴立て。進て曰く。憎  
 い哉。此奴機輪の轉ずる間は。詭辯を奮ひて他を恐嚇し。語塞がるに及び  
 ては。直に遁辭を構へて己を回護す。此の數歩の内。汝が命は我が手に懸  
 る。詭辯遁辭。今は用ふる所なし。言はずば則ち首足處を異にせむと。道人  
 莞爾として曰く。畏怖生を食る人に在りては。大神の威嚇は。能く利くべ

けれども丹心死を許したる人の前には。半文錢の直なし。大神よ。天下は公器なり。謹て之を翫び給ふこと勿れ。治法は公道なり。決して之を侮り給ふこと勿れ。大神眞箇に斯の事を聞かむと思召さば。先貪瞋痴慢の穢を去りて。仁義禮智の徳を修め。御身を清淨にして。而して後問ひ給へ。吾れ其の日を俟ちて陳述せむと云ひければ。神忽ち相好を變じ。侍臣に目成して。劔を抜いて飛び懸る。其の正體は。正しく愛宕の太郎坊とぞ見えにける。折こそあれ。一條の光線。天より射るよと見えしが。空中忽ち聲ありて曰く。天帝道人を召す。速に來よと。是に於て道人微笑して。別れを愛宕神に告ぐ。神と侍臣と。劔を抜いて立ちながら。枯木の如く。茫然として自失したり。

忽ち一朶の紫雲あり。正門の上の方より垂れ來りて。道人が脚を接す。道

人身を跳らして之を躡めば。恰も乗船場の棧橋を度るが如し。便ち首を翹れば。天使二神ありて雲背に立つ。束帶の淨らかなる。威儀の嚴かなる。共に人間の見る所に非ず。即ち命を傳へて曰く。天帝特旨を以て脚を召す。只吾等に隨ひて朝せよと。道人恭しく命を拜すれば。二神吾れを具して九天に向ふ。是の時地球の引力既に断れ果てにけむ。少しも身の重みなく。却て天上の引力に攝せられて。蒼穹を渉ること。猶順風に帆を颯げて江河を下るが如く。其の痛快なること。喩ふるに物なし。伏羲氏が雲車に乗り應龍に駕し。鬼神を導きて九天に登り。帝に靈門に朝せし時の境界は。斯くや有りけむ。蘇東坡が飄々乎として世を遺れて。獨立して羽化して登僊するが如しと云ひし時の心持は。乳臭しなど。自己の胸襟を弄びつゝ。物思ふにも非ず。思はぬにも非ず。脚を運ぶにも非ず。運ばぬに

も非ず。身世<sup>ロト</sup>俾<sup>ロト</sup>しく遣<sup>ロト</sup>れ。物我俱に忘じて。使神に随ひ行くほどに。忽ち乗  
せ來りし紫雲は。散じて驟<sup>ロト</sup>驟<sup>ロト</sup>たる瑞雲となるよと見えしが。身は既に眼  
も届かぬ公園の入口にぞ著きにける。彼の他力の行者が。弘誓<sup>ロト</sup>の願力に  
乗じて。彌陀の淨土に往生するも。斯くやと驚くばかりなり。」  
乃ち眼を放ちて四方八方を見渡せば。麗<sup>ロト</sup>かなる天津日は。六合に照り透<sup>ロト</sup>  
り。融<sup>ロト</sup>かなる天津風は。遠<sup>ロト</sup>近<sup>ロト</sup>に吹き和<sup>ロト</sup>み。遠山の黛<sup>ロト</sup>は。遙<sup>ロト</sup>に瑞雲のあなたに  
媚<sup>ロト</sup>ひ。公園の係<sup>ロト</sup>は。近く祥雲のこなたに笑<sup>ロト</sup>み。花の香の霞める林に。仙禽の  
歌ひ樂む風情。緑の草の濃<sup>ロト</sup>かなる岡に。神獸の跳<sup>ロト</sup>り遊ぶ有様など。其の目  
出たきこと。復た人間の有る所に非ず。道人餘りの不思議さに。使神に問  
て曰く。此れ何れの處ぞと。使神答て曰く。此れは是れ天帝の禁苑なり。宮  
闕<sup>ロト</sup>も此を去ること遠からず。只吾等に随ひ來よと。乃ち随ひて行くほど

に。そよ／＼と吹き來る風は。林を透<sup>ロト</sup>き樹を徹<sup>ロト</sup>りて。花の香十方に充滿し。  
うら／＼と霞む日かげは。山を照らし水を蒸して。祥雲八面に柵引きわ  
たれり。其の間より巍<sup>ロト</sup>然たる玉の甃<sup>ロト</sup>の層々<sup>ロト</sup>と見え隠れて。雲に入り霞に  
續く有様は。是れなむ天帝の宮闕<sup>ロト</sup>なるべし。彩雲の之を罩<sup>ロト</sup>め。芳樹の之を  
護り。風華の互に映じ。意境の漸く改まり行くも。實に故あること。にこそ  
と。蕭々<sup>ロト</sup>と脚を運ぶまに／＼。はや宮門にぞ著きにける。」  
宮門には國光門と云ふ額を掲<sup>ロト</sup>げたり。乃ち知る此の宮殿は。天津御國の  
名士たちが相會して。國光を宣揚するの境域なることを。使神は道人を  
客殿に誘<sup>ロト</sup>ひ。司客の神に引渡して。以て使事を復命す。道人は司客の神に  
接待せられて。設けの席に着けば。是はそもいかに。下界の衣服は。いつの  
間にか此の身を去りて。自然と脚には紫氣の袴を穿ち。身には瑞雲の袍

を襲ひ。腰には彩霞の帯を絡ひ。首には明月の冠を戴き。居然として天津御國の衣冠を着したること。いとく奇しけれ。聞くなり。くむかし釋尊の弟子を得度し給ひし時。善來比丘と一言宣へば。頭髮のづから落ち。俗服のづから脱して。頓に圓頭法衣の佛弟子となりしと。釋尊も流石の神なれば。是等の神通をやり給ひたりけむ。など不思議の餘りに思議をめぐらす折柄。司客の神揖して曰く。裝束既に整ひぬれば。いざ大神へ案内せむとて。余を導きて國土殿に。入り。天津國魂神に謁せしむ。國魂神は威儀の美はしくして。嚴かなる。宮殿の飾りて清らかなる。前の見る所に百倍したり。是れなむ此の境域内の主神なると。疑なく伺ひ知らるれば。瑞雲の袖席に敷かれて。明月の冠のづから低れたり。大神色を和らげて宣はく。神敎ありて。遙々卿を召す。九霄の路定めて。其の遠

きに疲れむ。併し此の天上の春は。彼の人間の春に孰れぞやと。余謹て對て曰く。賤人固より烟霞の癖あり。されば春毎に花に憧れて。下界の芳非に逍遙す。是の故に芳山の勝。東台の秀。嵐峽の美。いづれも吟咏を恣にせざるは無し。獨り奈何にせむ。下界の花は。左なきだにうつろひ易きを。無情の風雨其の艶を妬みて。年として騷客の情を惱まざるは無し。之を如何にぞ此の天上の。和日芳を養ひ。惠風翠を育み。彩雲祥靄共に情を盡くして。海の如きの春色を涵養したるの目出たきに。若かむや。賤人が烟霞の癖。升りて。昊天に聞えしにや。召して天上の春を賞せしめ給ふ。天恩優渥。何の賜物か。之に若かむと申上げれば。大神笑を含みて宣く。風流なる哉。卿や。天帝の卿を召させらるゝは。天上の春を賞せしめむ。には非ず。卿は夙に斯道の爲に。身をも家をも打ち忘れ。生涯の力を君と國と



に致して而して未だ曾て貧苦の爲に屈することなく。反對の爲に動ずることなし。今や一命を邪神の手裏に托して。尙生々世々の忠愛を期す。此の一片の丹心。聊か可憐の處あり。是を以て天帝卿を召して。其の情を盡さしめ給ふ。卿其れ之を了して。速かに帝に朝せよ。夫れ吾が天津御國の國士が帝に靈門に朝するには。鏡劔玉の三物を佩ぶ。今之を卿に賜らむとて。手づから天津眞浦が鍛ひたる雲龍の太刀一口。天津鍛冶が鑄たる彩風の鏡一面。天津玉工が磨りたる青薙の玉一串を賜ふ。余進みて恭しく之を受け。退きて謹て之を佩ひて。敢て恩命の辱きを拜す。大神も亦胸に入咫鏡を掛けさせ。左腋に入握劔を帶かせ。右腋に御統玉を佩ばして。余を率ゐて本殿を出でさせ給へば。忽ち天之浮橋現はれ出でし之を迎ふ。特に不思議なるは。此の橋高からず低からず。廣からず。狹からず。意

の之く所に向ひて生じ。睡の去るに任せて消え失せて。更に自己の眺望を遮らず。又他人の行歩を妨げず。實に自由自在なり。むかし國祖二神が開國の初めに蒼海原を渡らせ給ひし浮橋も。此の物なりけむ。唐の玄宗皇帝が仲秋の夜仙客に伴はれて。廣寒宮に遊びし時の境界も。斯くやありけむなど。思ひ出でつゝ行くほどに。いつしか吾れは是れ國魂神なる乎。國魂神は是れ吾れなる乎。又此の吾れを樂ましむるものは萬物なる乎。萬物を樂ましむるものは吾れなる乎をも打ち忘れつゝ。やがて禁門にぞ至りける。

大神は禁門の外より。一揖して敢て入り給ふ。余も之に習ひて肅として入り。玉階を経て玉墀を躡めば。躡む處冷かならず。暖かならず。堅かならず。柔かならず。脚跟まづ一種の妙觸をぞ感じける。此の間に往き交ふ神等。

互に笏しやくを正し纓ひょうを傾け。穆々むくく棣々ていけいとして絶えて人我の相なし。既にして主殿の神に攝せられて。大神の後に随ひつゝ。進みて天帝の宮殿に詣る。宮殿は悉皆珠玉を以て成る。其の美麗清浄なること。又前の國士殿に萬倍す。不思議の光ありて殿内より流れ出で。殿外八方に透き徹りて。其の明らかなること白晝の比に非ず。人の肺肝より骨髓せつこまで。皆照り徹され。而も眩くらゆからざるのみならず。肺肝は之を待ちて清浄に。骨髓は之に依りて潤澤す。玉座は高くして南に面せり。錦張懸り珠簾垂る。微妙の和氣ありて簾内より洩れ出で。殿裏の百物を薫かじ籠めて。其の温かなること温泉の比に非ず。人の五根より丹田まで。深く透き入りて。而も濕はざるのみならず。五根は之を待ちて明妙に。丹田は之に依りて豊富なり。面のあたり斯かる奇特に接しては。争いでか渴仰かつちやうの情興らざらむ。五體坐に

投じて。復た仰ぎ見ること能はず。一身唯恭敬の誠を以て満さるゝのみ。是の時天帝國魂くわんたまの神を以て。勅を傳へて宣はく。爾清丸治國の道に所思ありとかや。簡短に之を白ませよと。清丸勅を拜して。有難きこと骨髓せつこに徹し。謹て首を擧げて奏して曰く。凡そ天下國家を治むるは人に在り。人に賢不賢。才不才。智不智。能不能の千差萬別ありと雖も。之を要するに二類を出でず。一類を君子となし。一類を小人と爲す。されば君子の部類とても賢才智能の人のみに非ずして。不賢。不才。不智。不能の徒あり。小人の部類とても。不賢。不才。不智。不能の徒のみに非ずして。賢才智能の人あり。是を以て君子小人の別。混淆かうわう錯雜さくざく。復た判別すべからず。古人之が爲に。一言之を別ちて曰く。君子こんし。喻あや於お義ぎ。小人こじん。喻あや於お利り。と。喻あや於お義ぎとは何ぞや。公利公益の爲に。私利私益を忘るゝ事なり。喻あや於お利りとは何ぞや。私利私益の爲に。公利

公益を忘るゝ事なり。然らば則ち賢才智能。英雄を一世に氣取る人と雖も。私利私益の爲に。公利公益を忘るゝ者は小人なり。不賢。不才。不智。不能。敗朽を一世に甘むざる者と雖も。公利公益の爲に。私利私益を忘るゝ者は君子なり。君子とて他に異なるものに非ず。唯見る所廣く。憂ふる所長きが故に。社會の世話を焼き。國家の心配をする程の人のみ。見る所廣く。憂ふる所長きが故に。亦稱して大人と云ふ。人の上に立つべき賢なるが故に。號して君子と云ふ。君とは上に立つの謂ひ。子とは男子の美稱なり。言を換へて云はれ。公利公益を興さしめむ爲に。天より生み出だされし人なり。又小人とてり決して嫌ふべきものに非ず。唯見る所狭く。憂ふる所短きが故に。一身を利し一家を益する程の人のみ。見る所狭く。憂ふる所短きが故に。小人と云ふ。一身一家を利するが故に。亦匹夫と云ふ。匹夫と

は。一匹の男と云ふ義なり。言を換へて云はれ。私利私益を興さしめむ爲に。天より生み出だされし人なり。されば小人の不賢。不才。不智。不能の者をば。之を愛護して。身力を農工商賈の業に盡さしめ。中に就て賢才智能の者をば。之を保護して。精神を通商貿易の道に盡さしむべし。又君子の不賢。不才。不智。不能の者をば。之を擧用して。身力を郷里の務。學校の職に盡さしめ。中に就て賢才智能の者をば。之を擧げて。公利公益の事に任じ。小人の徒を護りて。私利私益の事に従はしむるは。即ち人類の天命。天賦のまに。天才天能を遂げしむるものにて。猶大工をして。家を造らしめ。左官をして。壁を塗らしめ。猿をして。木に升らしめ。鰻をして。魚を捕しむるが如し。是に於て。乎天下治まる哉。國事安い哉。人民樂しい哉。若

し之に反して。小人の賢才智能ある者を舉げて。之に一國の政を任ずれば。假令商に與して貨殖を謀り。姦に結びて賄賂を納むる等の汚行なきも。見る所狭く。憂ふる所短く。小に明らかにして大に闇きが故に。一時の治を圖りて。百王の大經を壞り。一世の安を貪りて。百世の大計を誤り。國の精神。民の元氣を沮み弱まして。獨立の命根を傷ふのみならず。結ぶ所の廷臣。用ふる所の幕僚。皆權謀術數の小人なるが故に。公明正大の士。光風霽月の人をば。忌みて之を退ぞけ。嫉みて之を遠ざけ。終に賢才智能の君子をして。空く草莽の間に老い。巖穴の中に朽ちしむ。小人が小人の位に居て。自己の事を行ふは固より咎なし。其れをして君子の位に立ちて。國家の事を行はしむ。是に於て其の咎。身を壞り家を亡ぼし。國家を危くするに足る。懼るべき哉。賢才智能の君子は。夫の天命を樂みて。少しも慍

む所なしと雖も。天理の昭明なる。終に之を晦ますべからず。民心おのづから廷臣を去りて。復廟堂を尊び重むせず。却て其の人の君に不忠。國に不義なるを憎みて。其の失體失行を責む。奸雄あり。民心の乖離斯くの如きを見て。吾れ取りて之に代らむとの野心を起し。巧言令辭。勇を鼓し勢に乗じて。以て人心を收攬す。無智の小民。無頼の惡漢は。之が腹心となり。之が手足となりて。縱横國家を蹂躪し。終に廷臣をして其の位を保たしめず。細民をして其の業に安むせしめざるに至りて極まる。斯くの如く小人の徒を舉げて。公利公益の事に任じ。君子の徒を斥けて。草莽巖穴の中に死せしむるは。即ち人類の天命天賦に反逆して。天才天能を倒さまに用ふるものなれば。猶左官をして家を造らしめ。大工をして壁を塗らしめ。獺をして木に升らしめ。猿をして魚を捕らしむるが如し。是に於て

乎天下亂る、哉。國事危い哉。人民苦い哉。吾が豊葦原の瑞穂國には、五箇年來國會を開かせられて、國民をして國政に參與せしめ給ふ。と説きかけられ、國魂神傍より注意して宣はく、勅諭簡短を要し給へり。多言は遠慮せよと。余始めて奏聞の冗長に涉れるに氣付き、謹で口を噤きて、恐懼の色面貌に溢れたり。」

天帝更に敕を傳へて宣はく、爾が奏する所其の意を得たり。降りて其の言ふ所を行へよ。天は人に神通自在を與へたれば、吾れ之を能せずと云ふとを許さず。若し天爾に之を許さば、彼れにも此れにも許すべし。然らば誰か之を行はむものぞ。爾誠に君に忠し國を愛せむと思はば、爾自身に之を行へ。他身に之を責むること勿れと。更に國魂神に敕して宣はく、爾は彼れに天津御國の國士殿の組織を示して、葦原の中津國の參考に

供へしめ、以て彼れが精神を啓迪せよ。切々偲々の情に於て盡さる所あること勿れと。國魂神謹て神敕を拜し給ひ、五體坐に投じて、感涙に咽びあへる清丸を、具して宮殿を下り、天之浮橋より、復國士殿に還りて、慇懃に其の組織方法を諭示し、再び使神に命じて、下土に送り還し給ふ。是の時道人の心は、神にも非ず佛にも非ず、仙にも非ず人にも非ず、得る所も無く、失ふ所も無く、喜ぶことも無く、悲むことも無く、唯無念無想にして、眼に天花の亂墜するを見、耳に天樂の合奏するを聞くのみ。斯くて使神に長空に伴はれ降りて、脚大地に着くと同時に、春宵一場の夢は覺めにけり。覺め來りて首を翹れば、四人伴しく升屋の奥庭なる小亭の燈下に臥して、天樂と聞きつる音は、清瀧川の水聲が、夜半の嵐に互えわたりて、潺々浚々と假寐の耳に響きしにて、天花と見つるは、窓外の櫻花が、愛

宕の山風ヤマノカゼに誘はれ來て、續々つづつ紛々まぎまぎと假寐の枕に亂れしにぞありける。聞  
くならくむかし黃帝は晝寢ひるねの夢に華胥くわしよの國に遊びて、怡然いぜんとして治道  
を自得し給ひしと。今道人は旅寐の夢に、天帝の國に遊ぶ。豈國家に益す  
る所無からむや。乃ち墨斗すみすを取り出で、之を誌し、強て命じて看花の肥  
と云ふ。」

三都看花記終

明治廿九年四月九日印刷  
明治廿九年四月十二日發行

正價金拾貳錢

著者 川合清丸

東京市本郷區駒込  
淺嘉町七十六番地

發行者 藤本重郎

東京市本郷區駒込  
吉祥寺町十八番地

印刷者 島保藏

東京市牛込區市ヶ谷加  
賀町一丁目十六番地

發行所 日本國教大道社

東京市本郷區駒込  
吉祥寺町十八番地

告 廣

國教ハ國ノ精神日本國教大道社設立大意  
 ヲ佛道ヨリハ善道ヲ經綸スルハナリ  
 ハ佛道ヨリハ善道ヲ經綸スルハナリ  
 テハ佛道ヨリハ善道ヲ經綸スルハナリ  
 愛ノ氣象トナリ精神ハ無善ハ先王此世  
 世衰ヘ道微ニシテ流弊古テハ尊嚴ニ  
 近世ニ至テハ精神ハ流弊古テハ尊嚴ニ  
 以テ國家ヲ傷ル者甚キハ外リテハ尊嚴ニ  
 ノ氣象トナリ精神ハ無善ハ先王此世  
 至レリ夫レ國ノ性命ニ係リテハ尊嚴ニ  
 出ル所一夫レ國ノ性命ニ係リテハ尊嚴ニ  
 ハ無シ今レ國ノ性命ニ係リテハ尊嚴ニ  
 夫レ國ノ性命ニ係リテハ尊嚴ニ  
 精神ヲ攬テ亡ボシテ去リテハ尊嚴ニ  
 精忠ノ象トナリ傷ハザラズテハ尊嚴ニ  
 萬世ニ維テ三千年來ハ海表ニ立シテハ尊嚴ニ  
 振興社會ノ組織ヲ整齊セザラズテハ尊嚴ニ  
 教ヲ觀ルニベカクテ未ダ其國ノ精神ヲ  
 德ヲ維持シ潤飾シテ以テ其國ノ精神ヲ

廣

其ノ其國ノ智ニシテ而シテ其人ノ壯ナルヤ我輩退テ我が國教ヲ觀ルニ大ナルコトハ六  
 合ヲ包テ小ナルコトハ細シク然ルニ我輩之ヲ先王ノ權ヲシテ他ノ撲滅スルニ任  
 必ズ眞理ニ契テ命ヲ喪ハントス我輩之ヲ先王ノ權ヲシテ他ノ撲滅スルニ任  
 セザラシク一國ノ性ヲ敢テ日本國教大道社ヲ創立シテ先王ノ權ヲシテ他ノ撲滅スルニ任  
 懣私見ヲ斥ケ其眞理ヲ弊害ノ中ヨリ拔キ其蘊奧ヲ秘密ノ中ヨリ發シテ完全無缺ノ國教  
 ノ私見ヲ斥ケ其眞理ヲ弊害ノ中ヨリ拔キ其蘊奧ヲ秘密ノ中ヨリ發シテ完全無缺ノ國教  
 ヲ私見ヲ斥ケ其眞理ヲ弊害ノ中ヨリ拔キ其蘊奧ヲ秘密ノ中ヨリ發シテ完全無缺ノ國教  
 精神ヲ結合シテ盛ニ忠愛ノ氣象ヲ振興シ道徳ノ根本ヲ培養シ社會ノ組織ヲ整齊シ國家ノ大  
 日本國教大道社ヲ創立シテ先王ノ權ヲシテ他ノ撲滅スルニ任

第一條 日本國教大道社規則  
 第二條 本國教大道社ヲ講明紹述スルヲ以テ主義トス  
 第三條 本國教大道社ヲ歸セシムルヲ以テ目的トス  
 第四條 本國教大道社ノ主眼ヲ國教ニ歸セシムルヲ以テ目的トス  
 第五條 皇族ハ名譽員ニ貴紳ハ特別員ニ神儒佛ノ碩學ハ顧問員ニ其他ハ翼贊員隨喜  
 第六條 贊成員ハ一回限金五拾錢隨喜員ハ金拾錢ヲ納メテ入社ノ信ヲ修ム其後一切  
 第七條 本社ハ主義目的ヲ達センガ爲毎月一回(紙員五十頁以上ノ)日本國教大道社  
 第八條 本社ハ名譽特別顧問翼贊ノ四員ニ限り雜誌ヲ原價(五錢郵稅五厘)ニテ配布

告

告

廣

第九條 シ右四員ハ半年分以上ノ前金ヲ納ムヘキ者トス  
 第十條 入社ハ拾錢ノ欲スル者ハ何人ヲ問ハズ國所番地姓名ヲ記シ翼贊員ハ五拾錢隨  
 第十一條 喜員ハ直ニ證票ヲ送附シテ爲換ハ駒込郵便局(宛テ)本社ニ送致スベシ  
 第十二條 本社ハ漸次神儒佛其他道學ノ正義ヲ講述セル書籍ヲ出版シ贊成員ニハ原價  
 第十三條 志士ノ寄附金ハ入社員ト否トニ拘ラズ之ヲ受領シテ以テ擴張ノ資本ニ充ツ  
 明治廿一年一月設立

發起者 故從三位勳二等子爵 山岡鐵太郎  
 社長 故從四位 子爵 本莊宗武  
 主幹 正三位勳一等子爵 烏尾小彌太  
 幹事 川合清丸 飯島德載 藤本重郎  
 東京本郷區駒込吉祥寺町十八番地  
 日本國教大道社





# 大道社發賣書籍廣告

## 日本國教 大道叢誌合本

- 第壹册 社長鳥尾小彌太君題字
- 第貳册 自第一號至第十號 名譽御員久邇宮親王殿下御題字
- 第參册 自第十一號至第二十號 名譽御員伏見宮文秀女王殿下御題字
- 第肆册 自第二十一號至第三十號 名譽御員山階宮親王殿下御題字
- 第伍册 自第三十一號至第四十號 名譽御員村雲日榮尼王殿下御題字
- 第陸册 自第四十一號至第五十號 特別御員子爵三浦梧樓君題字
- 第柒册 自第五十一號至第六十號 特別御員伯爵東久世通禧君題字
- 第捌册 自第六十一號至第七十號 特別御員侯爵久我通久君題字
- 第玖册 自第七十一號至第八十號 顧問員專修寺派管長常磐井堯熙師題字
- 自第八十一號至第九十號

廣

告

廣

告

大道叢誌は道義の根柢を國家の上より建立し智徳の萌芽を精神の中に養成するを以て任とし敢て世上紛々の時事に容れず是れ江湖の諸君が永遠に本誌を愛讀せらるゝの所以にして亦た本社の聊か其の恩顧に答へんとて殊に布衣裝金字入の美本にして几席の伴たるに適せしめ價格を低廉にして購讀の便益を謀る所以なり

●日本國教 大道叢誌 正價金八錢 郵税十錢 四十五號まで每號五厘 四十六號より每號貳錢 四十九號より每號五厘 五十號以上の諸君の御意に依りて

●佛敎演說 一名活如來活說法 正價三拾五錢 郵税四錢 右は主筆川合清丸氏が天下一般の人に佛敎の眞理道徳を説き聞かさむとて深切を盡くし活機を放ちて演述したる筆記なり其の佛敎の眞理を破せしむるは山岡鐵舟居士が讚嘆の餘りに活如來の活說法と云ふ題辭を書して贈られしにて知るべしされば此の書を讀破佛家の信心を發起せし者無頼漢の道徳に歸順せし者擧げて數ふべからず初版二版三版四版五版六版既に出版せし故今一層印刷を鮮明にし製本を堅牢にして第七版を發行す

●佛道本論 一名法供養 正價四拾五錢 郵税八錢 歐米の風吾國に吹暴びて文物制度彼に異なる者一切廢せられ文學は既に歐米の物とな

廣

り宗教も亦將に歐米の物とならむとして神州の正氣殆ど消滅せむとせし際得庵居士一人身を横たへて肯ぜず朝に出で野に出で生を冒し死を冒して抗議争論僅に一片の丹心を以て終に三道の國教を繋ぎ留めらる其一大著述せられし者即ち此書なりされば年來修し得たる正法を今に破せば翻手に入て殺活自在なると世に此書の出づるも亦正法を人天に供養する者なり學佛の士は是非熟讀あれ

眞正無神論

第五版

正價貳拾錢

郵稅四錢

右は社長得庵居士が歐洲を巡覽して歸朝せられし際歐米一神教の迷妄を如何にも氣の毒に思はれいさ此迷夢を撥破し呉れむとて天帝鬼神幽靈天狗等所謂不思議分際に屬する玄妙の道理を悟道の正知見を以て而も極て卑近に説明されし珍書なり去は鬼神幽靈等の事を論ずる者古今斯くの如き者なし

時事談

正價拾七錢

郵稅貳錢

右は社長得庵居士が滿腔の忠魂と絶世の卓見とを以て方今流行の西洋主義の恐ろしき弊害を痛論せる者なり讀て要領の處に至れば全身に寒毛を起し忠君愛國の精神を肺腑より興起せしむ居士が時事に對せらるゝ談論は盡て餘蘊なし君に盡くし國に報いむ士君子は必ず一讀すべし

正法眼藏

正價拾八錢

郵稅貳錢

右は社長得庵居士が學佛の金剛力を奮ひて浩瀚涯りなき佛法の極意を僅か真如法界諸

廣

法實相如來藏性諸法緣起の四篇に收めて極めて短簡要約に凝めて明晰痛快に説破せられし者なり此書全篇漢文を以て成るが故に佛敎學校の教科書に最適用なるのみならず哲學士にして佛法の何物たるを伺はむと欲する者佛敎の妙用自在を吾が物にせらるべし

得庵詩文

正價貳拾七錢

郵稅四錢

右は社長得庵居士が絶世の奇才と曠世の達識とを以て順逆二境に出沒するごとに吟咏せられし詩文にて自適の處あり憤懣の處あり况や寶刀篇斯文篇儒佛篇無名篇地獄篇秦火篇等の如きは皆絶代の大論にして優かに老莊以上の文章たり故に一讀人の胸襟を痛快にし眼睛を豁開するの大力量あり

王法論

正價貳拾三錢

郵稅四錢

右は鳥尾得庵居士が王法即ち治國平天下の道即ち政治上の要領に於ける滿腹の精神を堂々たる漢文にて論述せられしものなり此書名分法原國本主義性法故本事理大權爲政辯難の十篇より成る篇々一として至理を貫き至道を穿たざるは無し曾て善美なる木版にて發行せられたりしが今其の木版を本社へ寄附せられし故に刷行して善美なる木版に便にす天下國家の事に志むらむ士は請ふ一讀して治平の綱柵を掌握し給へ

陰陽錄

正價拾五錢

郵稅貳錢

今日に當り我が社が尤も先づ大聲疾呼して天下の志士に勸むる所のものは實踐躬行なり既に實踐躬行の地位は一躍して到り難し先づ禍福の說より此の誓の缺くべからざるを知らむ蓋し聖賢の地位は一躍して到り難し先づ禍福の說より此の誓の缺くべからざるを知らむ

告

告

めむと欲して能はざるが如きに至るは下學して上達するの事なり袁氏没後百餘年にし  
て功過格は盛に世に行はれ世の善に志すもの袁氏に效法するを知らざるなし此の書の  
價值固より多言を要せざるなり但舊本句讀誤謬甚しく殆ど讀むべからざるものあり我  
が社が訂正して之を天下の志士に紹介する所以なり

**國之大經** 正價貳拾錢 郵稅四錢

經の條理脈絡は緯の爲に紊亂せられず緯の錯綜變化は經によりて維持せらる經は緯を  
貫く所以なり故に經剛ければ國強く經弱ければ國衰へ經斷ゆれば國亡ぶ此の書經に緯を  
して大と曰ふ蓋し經中の大經なり大經に冠して國と曰ふ蓋し國家組織の根本なり夫れ  
國に政治あり法律あり經濟あり軍務あり文學宗教哲學化學物理農工商藝あり  
農工商藝家みな「國之大經」を讀まざるべからず大經分けて九經となす其の目如何眼人  
々に在り卷を繙かば隻手國之大經を握り得て躍々たらむ

原價五錢 郵稅貳冊まで貳錢

**太廟諄辭** 正價六錢 郵稅貳冊まで貳錢

右は本社主筆川合清丸氏が愛國の情地へ難きに伊勢太廟へ參拜して一七日肅戒し精神を凝らし至誠を盡して祈  
願せし祝詞なり蓋し國家は政治の骨髄を成し教育を筋とし經濟を肉とし習慣を皮とし一語一涙にて世に獨立する者なるを今  
治の骨折れ教育の筋切れ經濟の肉落し習慣の皮破れて殆ど獨立の道なき事を一語一涙にて世に獨立する者なるを今  
學の書生來て神の筋切れ經濟の肉落し習慣の皮破れて殆ど獨立の道なき事を一語一涙にて世に獨立する者なるを今  
祝詞を熱讀して益々忠實の誠を篤くし附録を玩味して愈々誠敬の情を盡し給へ

原價八錢 郵稅貳冊まで貳錢

**大道揭示講義** 正價六錢 郵稅貳冊まで貳錢

右は大道學館の揭示五箇條を同館の學監川合清丸氏が同館生徒の爲に滿腔の熱血を吐露して講述せし講義録なり

抑も此の揭示五箇條は即ち國家教育の骨髄にて日本男兒が日本魂を鍛ひ上げ磨き出さむ要領なれば苟も教育に志  
あらむ父兄は一讀して子弟の方向を定むべく學問に志あらむ子弟は百讀して一生の精神を固むべし

**神佛三教裁判** 原價五錢 郵稅貳冊まで貳錢

右は米國の耶穌教宣教師アツキンソン氏が神戶湊川神社にて演説して神佛を輕蔑し國家を侮辱し祭典を誹議し國體  
を蹂躪せしを佛說居士日加田榮氏が即坐して辯駁し神佛二道の眞理に照して公明正大に裁判を下し抑人に皇國  
起し神佛二教の何物たるを神佛二道の眞理に照して公明正大に裁判を下し抑人に皇國  
き神佛二教の何物たるを神佛二道の眞理に照して公明正大に裁判を下し抑人に皇國  
ら地獄に墮落して水火の阿鼻を受ける實なるを神佛二道の眞理に照して公明正大に裁判を下し抑人に皇國  
追放の宣告を申渡し、珍事なり

**憂國涙** 原價五錢 郵稅貳冊まで貳錢

右は會て本誌に掲げたる血涙問答含涙演説落涙演説の三篇を編纂せし者なり初なる血涙問答は横濱稅關官吏野村  
右二氏と埃及の將軍アラビヤの演説の筆記にて埃及の亡國の由來洋人森點の謀略を説く中なる含涙演説は米國信  
佛者アルゴット氏に從ひて來朝せる錫蘭人ダンマバ氏に於て洋人の狡點を洋人の論議を論議する落涙演説は米國の  
國に及びし悲愴慘狀を説く錫蘭人ダンマバ氏に於て洋人の狡點を洋人の論議を論議する落涙演説は米國の  
國を視るが如し愛國の士は必ず一讀して此前車の覆轍を鑒み以て後車の誡めをせざるべからず

原價五錢 郵稅貳冊まで貳錢

**修身實驗錄** 原價五錢 郵稅貳冊まで貳錢

右は故人水野南北氏の原著なるを方今國秀の第一流なる榎橋柳子氏が年來實驗の上其素を抜かれし者なり其要領  
は飲食衣服を節し家屋用度を愛し天より受けたる果報を報す疲弊に陥る故に志あらむ人は此方法に由りて心を  
法を論ず今や華美の風行はれて世の中奢侈に移り知らず識らず疲弊に陥る故に志あらむ人は此方法に由りて心を  
轉下身を勵し破家の邪路より出世の直路に跳り出て給へ

原價五錢 郵稅貳冊まで貳錢

**外護談** 原價六錢 郵稅貳冊まで貳錢

右は會て本誌に掲げたる血涙問答含涙演説落涙演説の三篇を編纂せし者なり初なる血涙問答は横濱稅關官吏野村  
右二氏と埃及の將軍アラビヤの演説の筆記にて埃及の亡國の由來洋人森點の謀略を説く中なる含涙演説は米國信  
佛者アルゴット氏に從ひて來朝せる錫蘭人ダンマバ氏に於て洋人の狡點を洋人の論議を論議する落涙演説は米國の  
國に及びし悲愴慘狀を説く錫蘭人ダンマバ氏に於て洋人の狡點を洋人の論議を論議する落涙演説は米國の  
國を視るが如し愛國の士は必ず一讀して此前車の覆轍を鑒み以て後車の誡めをせざるべからず

原價六錢 郵稅貳冊まで貳錢

右は嘗て求法の爲來朝したる英國海軍佐官フナクス氏が齎し來れる精腔の熱血を澆いで江州坂本にて演説したる筆記を主筆川合氏が之に十分の意見を加へて演説したる筆記を合刷したるものなれば正法を外護するには満分の効力あるべし故に命じて外護談を云ふ護法扶宗の士は先づ一本を得て一讀し給へ

### ●生死論

正價三錢 郵稅四冊まで貳錢

右は本社特別員陸軍中尉大原武慶氏が愛國の餘居腹せられし際本社主筆川合清丸氏が引導を渡す心得にて親しく破り君子も心を此時に惱まし勇者の力も此時に弱り智者の働きも此時に鈍るされば生死の理は大丈夫たる者の尤も覺悟せざるべからざる一大事なり今此篇は生死の眞理を學ぶ視るが如く昭明痛快に脱き盡くし終に生死の外に脱し比與未練の源底を叩き抜くべし

### ●佛法必用論

正價三錢 郵稅四冊まで貳錢

右は主筆川合清丸氏が或る富家家の佛法の必用を問ひしに答て其必用なる所以を老婆深切に脱き盡くし者なれば一讀せし者は他方自力に通じて佛法の必用を感ぜざる者なし殊に美應の小冊子なれば合社發會の祝物歳首歳末の贈物等に尤も適當にして一粒萬倍の所益あらむ

### ●福田説

正價貳錢五厘 郵稅四冊まで貳錢

右は本社主筆川合清丸氏が或る富家に新年を賀しし書翰なり蓋し其意家運の繁榮を進むるに在る故に初に因果報の理を談し中に因果増減の理を脱き後に福田に福種を植ゑて榮華を子孫に傳ふる方法を示すされは家運の繁榮を思ひ子孫の幸福を希はむ人士は熱讀して其方法を知り餘慶を治く子孫に及ぼし榮華を永く家門に傳へ給へ

### ●天理教論

正價貳錢五厘 郵稅四冊まで貳錢

右は本社主筆川合清丸氏が天理を以て天理教の天理ならざるを論ぜしものなり

### ●萬國宗演説集本編

頁數百一 正價拾貳錢 郵稅貳錢

### ●萬國宗演説集續編

頁數百二 正價拾貳錢 郵稅貳錢

右は昨年九月米國にて開きたる萬國宗教大會場裏にて世界の宗教家が演説したる筆記を大原喜吉氏が其儘に翻譯せし者なり中に就て本邦より参会せられし諸師の演説中には非常の喝采を得て其原稿は米人が懸望して米國にて出版せし者あり又錫蘭人ダンマパーラ氏の大會中最第一なりと評判ありし演説も網羅して洩すこと無ければ世界萬國の宗教相場を知るには最便の好書なり故に發兌尙肆より請ひ受けて讀者諸君の爲に發賣す

### ●謙翁道話

正價拾錢 郵稅貳錢

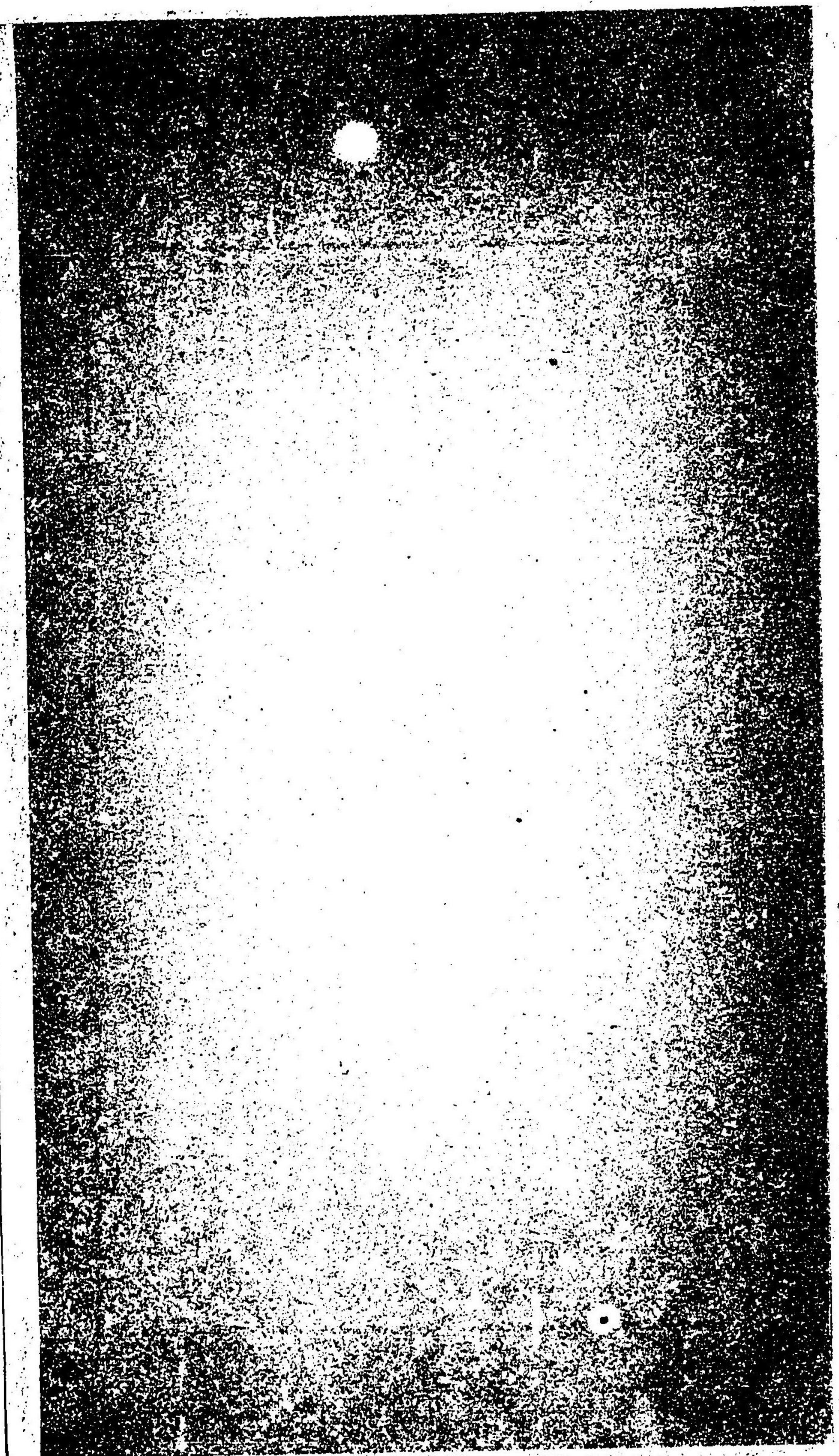
右は心學の先生故三谷謙翁が悟道の學力を以て一部の佛說不動經を極平話に講述せられしを方今心學傳統講師川尻實峯居士が筆記せられし者なり本來短簡なる佛經を又短簡に講述す人を殺すの寸鐵に非ずば貪瞋痴を害するの利劍なるべし

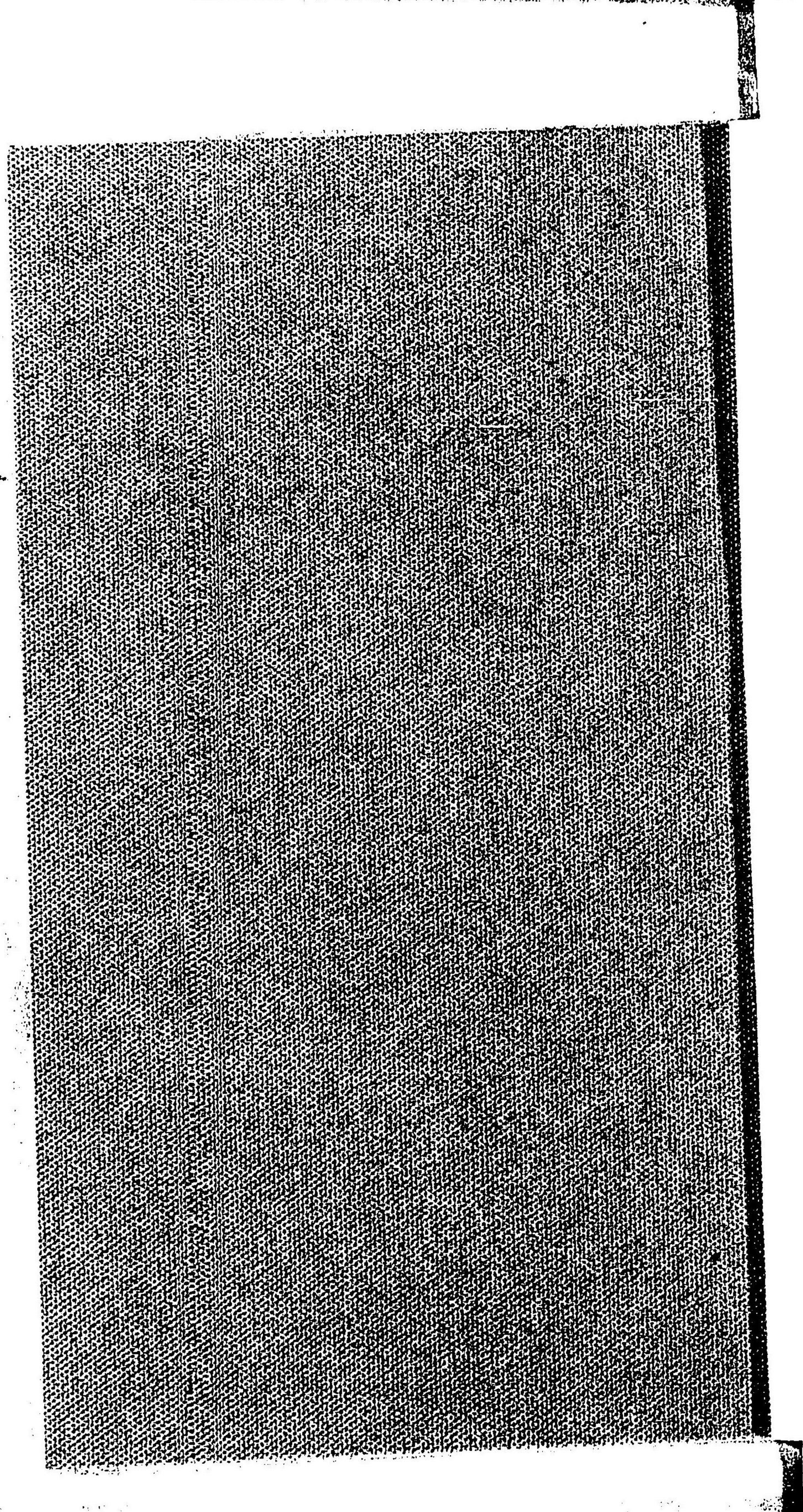
### ●右書籍 本社賛成員に限り 原價にて需に應ず

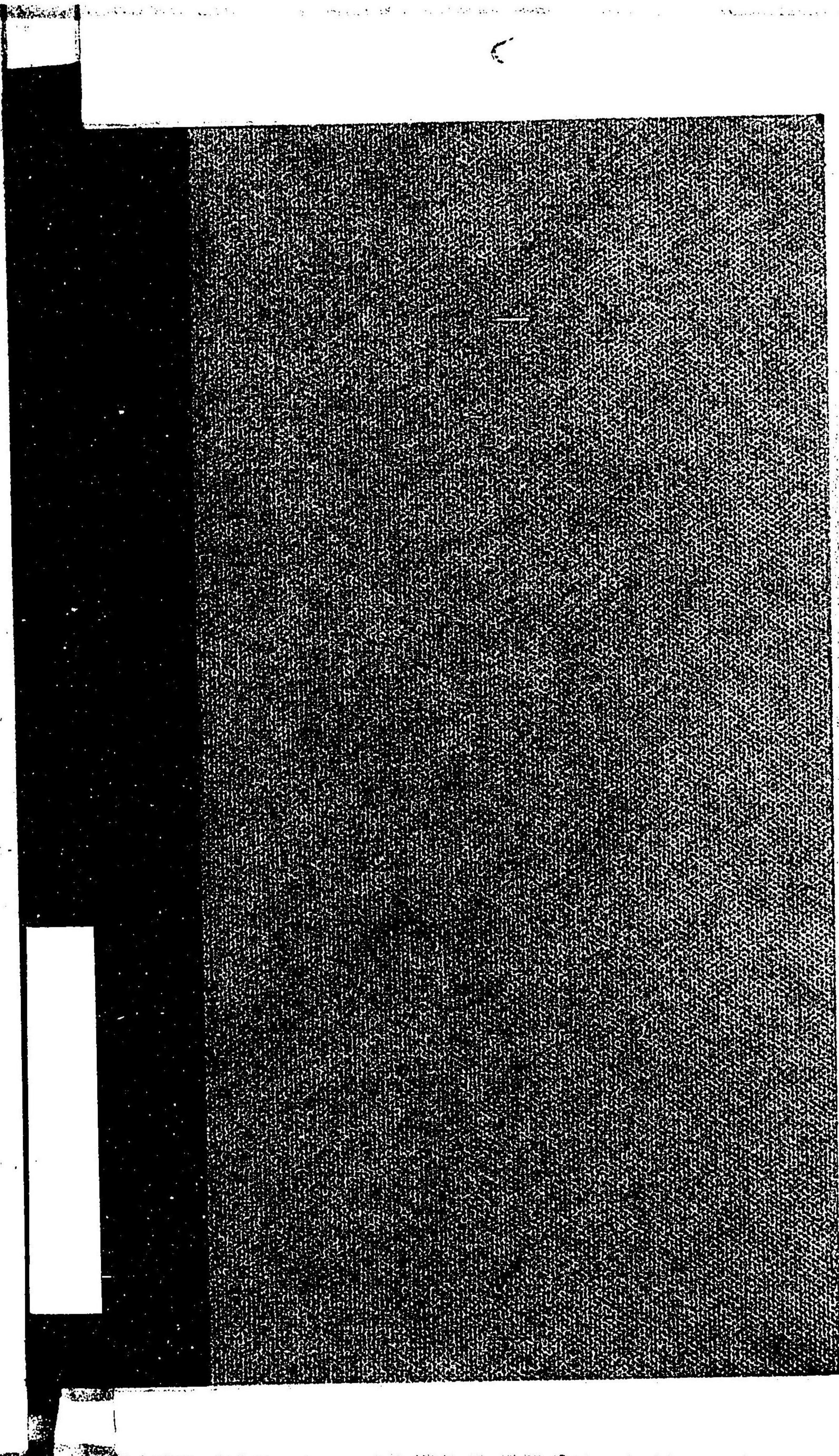
但し本社規則書入用の諸君は郵券貳錢を送られなば早速送呈すべし

東京市本郷區駒込吉祥寺町十八番地

日本 國教 大 道 社









特20

414

三都看花記

国立国会図書館

022485-000-8

特20-414

三都看花記

川合 清丸/著

M29

ADB-0151



